

# 泉南市遺跡群発掘調査報告書 XIX

泉南市文化財調査報告書 第三十六集

2002. 3

泉南市教育委員会



## 序 文

泉南市は大阪南部に位置し、海・山・川を備え、年間を通して温和な気候に恵まれる豊かな自然環境を有しています。これらの条件から、遙か昔より人々の生活の営みがこの地で行われてきました。その結果、市内では93ヶ所に及ぶ多くの遺跡が残されています。

しかし近年では、関西国際空港という巨大プロジェクトに伴う大規模な開発等によって、私達を取りまく環境が大きく変化することになりました。都市化が進み、道路などが整備されるなど、生活の利便性が向上する一方、それらによって先人達が残してくれた貴重な歴史遺産が失われる危険性が高まりつつあることも事実です。

このような状況で、本市は貴重な文化財を後世に永く伝えてゆくという重要な責務を果たすため、市内遺跡群発掘調査を行い、毎年『泉南市遺跡群発掘調査報告書』として公表させて頂いております。

本書が市内の歴史情報を豊かにし、市民の皆様が郷土の歴史をより一層身近に感じていただける一助となることを願ってやみません。

最後になりましたが、調査にご協力頂きました地元土地所有者、近隣住民の皆様、並びに関係諸機関の方々には、深く感謝の意を述べさせていただきますと同時に、今後とも本市文化財行政に、より一層のご理解、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

平成14年3月

泉南市教育委員会  
教育長 亀田章道

## 例 言

1. 本書は、泉南市教育委員会が平成13年度国庫補助事業として計画し、生涯学習課が担当・実施した泉南市遺跡群の緊急発掘調査事業の報告書である。
2. 調査は、泉南市教育委員会生涯学習課、仮屋喜一郎・岡田直樹・石橋広和・岡 一彦・城野博文・河田泰之・大野路彦を担当者とし、また事務担当者を角間幸司、西澤順也として、平成13年4月1日に着手し、平成14年3月31日に終了した。
3. 調査及び整理の実施にあたっては、江尻美代子、蒲生徹幸、蔵田弘幸、田上真理、富 愛、福井元氣、藤野 渉、真鍋紀美子諸君らの協力を得た。  
また、松本堅吾氏から有益な助言・協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。
4. 本書の執筆は、岡・城野・河田・大野が行った。執筆の分担は目次に記した。
5. 現地調査における写真撮影は各担当者が行い、出土遺物の写真撮影は河田・大野が行った。
6. 本書の編集は仮屋・岡・河田・大野が行った。
7. 調査における出土遺物及び図面、写真などの諸記録は、泉南市埋蔵文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを望むものである。

## 凡 例

1. 各調査区には、個別の番号をつけている。番号の基本構成は、「遺跡略称（記号）－年度－通し番号」である。遺跡の略称は、男里遺跡－ON、戎畑遺跡－EB、高田遺跡－KD、幡代遺跡－HT、岡中遺跡－OK、市場遺跡－IT、岡田遺跡－OKD、岡田西遺跡－OKDW、中小路北遺跡－NKN、中小路南遺跡－NKS、北野遺跡－KT、海会寺跡－KAI、下村遺跡－SM、である。調査年度を表す場合、元号年度は西暦年度に読み替え、上位2桁を省略して表現している。

なお本報告書では、報告文は遺跡毎に章だてしているため、基本的に各章中では遺跡名称を省略している。
2. 図中の方位は、PL.1・2では真北を、各調査区位置図・地形図では国土座標VI系にもとづく座標北を、各調査区平面図では磁北を表している。
3. 本文及び図版中に示したレベル高は、すべてT.P.+(m)の数値を使用しているが、T.P.+は省略している。
4. 本書で扱う地形分類図は、豊田兼典氏が作成した。
5. 遺構名称は、アルファベットと任意の数列の組合せで表している。アルファベットは、SD－溝、SK－土坑、SX－性格不明遺構、Pit－柱穴をそれぞれ表す。遺構番号は、2桁を原則として1桁の数字の場合は、その前に0を付している。また、調査区毎に遺構の種類別に通し番号を付している。
6. 遺物実測図版では、断面の表示を便宜上、土師器・土製品・陶磁器－白抜き、須恵器－黒塗り、瓦器－トーン、瓦－斜線のように塗り分けた。また、黒色土器は内外面の黒化を模式的にトーンで貼り分けている。
7. 出土遺物の番号は、遺跡毎に土器、瓦の区別無しに通し番号を付した。なお、遺物実測図及び挿図と写真図版では、遺物番号は統一している。また、同一写真図版内で複数の遺跡の遺物が存在する場合、番号の前に遺跡の略称を付している。
8. 遺物の出土量を表すのに用いたコンテナは、容積約27.5ℓのものである。

# 目 次

第1章 調査の経過	(岡)	1
第2章 男里遺跡の調査		6
第1節 既往の調査	(岡)	6
第2節 01-1区の調査	(河田)	7
第3節 01-2区の調査	(河田)	8
第4節 01-3区の調査	(河田)	8
第5節 01-4区の調査	(河田)	9
第6節 01-5区の調査	(岡)	9
第7節 00-10区の調査	(河田)	10
第3章 戎畑遺跡の調査	(河田)	12
第1節 既往の調査		12
第2節 01-1区の調査		12
第4章 高田遺跡の調査	(河田)	14
第1節 既往の調査		14
第2節 01-1区の調査		14
第3節 01-2区の調査		15
第4節 01-3区の調査		15
第5章 幡代遺跡の調査	(岡)	16
第1節 既往の調査		16
第2節 01-1区の調査		16
第6章 岡中遺跡の調査	(河田)	18
第1節 既往の調査		18
第2節 00-2区の調査		18
第7章 芋掘遺跡の調査	(河田)	20
第1節 既往の調査		20
第2節 01-1区の調査		20
第8章 岡田遺跡の調査	(河田)	22
第1節 既往の調査		22
第2節 01-1区の調査		22
第3節 01-2区の調査		24
第4節 01-3区の調査		24
第9章 岡田西遺跡の調査	(河田)	26
第1節 既往の調査		26
第2節 00-1区の調査		26

第10章 中小路北遺跡の調査	(河田)	28
第1節 既往の調査		28
第2節 00-1区の調査		28
第11章 中小路南遺跡の調査	(城野)	29
第1節 既往の調査		29
第2節 00-1区の調査		29
第12章 北野遺跡の調査		30
第1節 既往の調査	(大野)	30
第2節 01-1区の調査	(河田)	30
第3節 99-3区の調査	(大野)	31
第13章 海会寺跡の調査	(河田)	33
第1節 既往の調査		33
第2節 01-1区の調査		33
第3節 01-2区の調査		34
第14章 下村遺跡の調査	(河田)	36
第1節 既往の調査		36
第2節 01-1区の調査		36
第15章 まとめ	(河田)	38
報告書抄録		巻末

## 挿 図 目 次

第1図 男里遺跡調査区位置図	6
第2図 男里遺跡01-1区地形図	7
第3図 男里遺跡01-2・3・4区地形図	8
第4図 男里遺跡01-5区地形図	9
第5図 男里遺跡00-10区地形図	10
第6図 戎畑遺跡・高田遺跡調査区位置図	12
第7図 戎畑遺跡01-1区地形図	13
第8図 高田遺跡01-1・2・3区地形図	14
第9図 高田遺跡01-1区出土の遺物	15
第10図 男里遺跡・幡代遺跡調査区位置図	16
第11図 幡代遺跡01-1区地形図	16
第12図 岡中遺跡調査区位置図	18
第13図 岡中遺跡00-2区地形図	18
第14図 市場遺跡調査区位置図	19

第15図	芋掘遺跡調査区位置図	20
第16図	芋掘遺跡01-1区地形図	21
第17図	岡田遺跡01-1区地形図	22
第18図	岡田遺跡・岡田西遺跡・中小路北遺跡・中小路南遺跡調査区位置図	23
第19図	岡田遺跡01-2区地形図	24
第20図	岡田遺跡01-3区地形図	24
第21図	岡田西遺跡00-1区地形図	26
第22図	中小路北遺跡00-1区地形図	28
第23図	中小路南遺跡00-1区地形図	29
第24図	北野遺跡・海会寺跡調査区位置図	30
第25図	北野遺跡01-1区地形図	30
第26図	北野遺跡99-3区地形図	31
第27図	北野遺跡99-3区出土の遺物	32
第28図	海会寺跡01-1・2区地形図	33
第29図	海会寺跡01-1区出土の遺物	34
第30図	海会寺跡01-2区出土の遺物	35
第31図	下村遺跡調査区位置図	36
第32図	下村遺跡01-1区地形図	36

## 表 目 次

第1表	平成13年度発掘及び試掘調査届出一覧表	2
第2表	発掘調査一覧表	3
第3表	試掘調査一覧表	4
第4表	立会調査一覧表	5
第5表	文化財一覧表	41

## 図 版 目 次

PL. 1	泉南地域の文化
PL. 2	泉南地域の地形分類
PL. 3	男里遺跡・戎畑遺跡・高田遺跡・幡代遺跡調査区
PL. 4	岡中遺跡・芋掘遺跡・岡田遺跡・岡田西遺跡中小路北遺跡・中小路南遺跡 北野遺跡①・海会寺跡・下村遺跡調査区
PL. 5	北野遺跡調査区②

- PL. 6 男里遺跡0-1・2・3区
- PL. 7 男里遺跡01-4・5区、00-10区
- PL. 8 戎畑遺跡01-1区、高田遺跡01-1・2区
- PL. 9 高田遺跡01-3区、幡代遺跡01-1区、岡中遺跡00-2区
- PL. 10 芋掘遺跡01-1区、岡田遺跡01-1・2区
- PL. 11 岡田遺跡01-3区、岡田西遺跡00-1区
- PL. 12 中小路北遺跡00-1区、中小路南遺跡00-1区、北野遺跡01-1区
- PL. 13 北野遺跡99-3区
- PL. 14 海会寺跡01-1・2区、下村遺跡01-1区
- PL. 15 海会寺跡01-1・2区、高田遺跡01-1区出土の遺物
- PL. 16 北野遺跡99-3区出土の遺物

# 泉南市遺跡群発掘調査報告書 XIX

## 第1章 調査の経過

長引く経済不況の影響下、市内における発掘届出件数は、昨年までやや減少する傾向であったが、今年度は一転して微増する結果となった。しかし、内容的には届出件数は増えたものの届出全体の面積は大きく減っており、このことは、民間や公共を問わず大規模開発の減少が顕著であることを反映している。今後もこの傾向は続くものと考えられ、大、中規模の開発に起因した調査よりも個人住宅の老朽化による建て替えに伴った小面積の調査が増加してゆくであろう。

このような状況下、今年度本市において第2表のと通りの発掘調査が行われた。このうち本書の本文中において報告する遺跡数は13遺跡、調査件数は未報告分を含めて24件である。毎年の傾向であるが、今年度も大半を小規模な調査が占める結果となっている。

以下、それぞれの遺跡について調査の経過をみてみたい。

男里遺跡は、泉南市内最大の規模を誇る旧石器から近世の複合遺跡である。以前から住宅建設等に伴う小規模な調査が数多く行われており、近年では府道建設や遺跡中央部に位置する双子池の改修工事等による大規模な調査も増加し、様々な時代の歴史情報が数多く得られている。本書では昨年度の未報告分とあわせて6件を報告している。

戎畑遺跡は、平成7～8年度に大規模な区画整理事業に伴う調査が行われ、数多くの真蛸壺焼成坑や土坑墓等が検出され、新聞等でも大きく報道されるなど注目を浴びた遺跡である。今年度は区画整理地内において1件の調査が行われた。

高田遺跡は、これまで数回の調査例を数えるのみであるが、今年度は3件の調査が遺跡の北東部で行われた。

幡代遺跡、岡中遺跡は、金熊寺川の沖積作用によって形成された地形に立地しており、ともに現集落内を中心に小規模ではあるが数多くの調査が行われている。幡代遺跡では今年度の1件、岡中遺跡は、昨年度の未報告分1件を報告している。

芋掘遺跡は、分布調査によって確認された遺跡であるが、これまで発掘調査は行われず、その内容はまったく不明であった。今年度、はじめて発掘調査が行われることとなった。

岡田遺跡は、過去数多くの調査が行われており、近年の調査では部分的に現地地形が近代に大きく改変されたことなどが明らかになってきている。本書では今年度行われた3件の調査を報告している。

岡田西遺跡は、市道新設に伴い大規模な調査が行われ、中世の灌漑施設等が確認されている。今回は昨年度の未報告分1件を収録している。

中小路北遺跡、中小路南遺跡は樫井川左岸にひろがる広大な洪積段丘低位面に立地する遺跡である。中小路北遺跡では今回はじめての調査が行われた。中小路南遺跡は、過去数回の調査例があり、中世の灌漑用と考えられる水路等が検出されている。本書では昨年度の未報告分1件を収録している。

北野遺跡は、これまでの調査で平安時代後期の掘立柱建物等が検出されており、遺跡南東部に位置する熊野街道に比定される道路との関係が注目される。本書では未報告分を含めて2件を報告している。

海会寺跡は、国史跡に指定されている白鳳時代建立の寺院跡であるが、近年では寺院跡周辺の調査が増加している。今年度は2件の調査が行われた。

下村遺跡は、過去に数例の調査が行われているが、今年度の調査はデータの少ない遺跡の西部で行われた。

第1表 平成13年度発掘及び試掘調査届出一覧表

平成13年12月31日現在

年 月	発 掘		試 掘		合 計	
	件 数	面積 (㎡)	件 数	面積 (㎡)	件 数	面積 (㎡)
13年・1	3	832.40	2	5,483.60	5	6,316.00
2	4	734.33	3	5,289.63	7	6,023.96
3	4	705.59	1	13,858.46	5	14,564.05
4	6	1,496.07	7	3,650.780	13	5,146.850
5	6	2,634.02	3	25,962.95	9	28,596.97
6	1	439.20	1	480.06	2	919.26
7	3	1,552.30	2	2,750.09	5	4,302.39
8	1	124.52	3	16,258.73	4	16,383.25
9	0	0.00	1	2,969.27	1	2,969.27
10	7	1,196.36	7	6,455.97	14	7,652.33
11	5	3,678.79	0	0.00	5	3,678.79
12	7	920.61	3	3,837.44	10	4,758.05
合 計	47	14,314.190	33	86,996.975	80	101,311.165

第2表 発掘調査一覧表

平成13年12月31日現在

No.	遺跡名	地区名	位置	申請者	面積 (㎡)	用途	調査年月	備考
1	男里遺跡	01-1区	馬場		303.22	個人住宅	13年6月	本書掲載
2	男里遺跡	01-2区	男里		100.47	個人住宅	13年7月	同上
3	男里遺跡	01-3区	男里		100.80	個人住宅	13年7月	同上
4	男里遺跡	01-4区	男里		97.63	個人住宅	13年7月	同上
5	男里遺跡	01-5区	男里		158.34	派出所	13年7月	同上
6	男里遺跡	01-6区	男里		1200.00	農業関係	13年10月 ～12月	別書掲載
7	男里遺跡	00-10区	馬場 幡代		300.26	個人住宅	13年1月	本書掲載
8	戎畑遺跡	01-1区	樽井		176.79	個人住宅	13年11月	同上
9	高田遺跡	01-1区	男里		439.2	個人住宅	13年7月	同上
10	高田遺跡	01-2区	男里		124.52	個人住宅	13年8月	同上
11	高田遺跡	01-3区	男里		102.6	個人住宅	13年7月	同上
12	幡代遺跡	01-1区	幡代		356.8	個人住宅	13年11月	同上
13	岡中遺跡	00-2区	信達岡中		229.14	個人住宅	13年2月	同上
14	市場遺跡	01-1区	信達市場		283.00	墓地造成	13年4月	トレンチケ所。遺構・遺物なし(第14図)
15	芋掘遺跡	01-1区	新家		247.00	個人住宅	13年11月	本書掲載
16	岡田遺跡	01-1区	岡田		200.19	個人住宅	13年7月	同上
17	岡田遺跡	01-2区	岡田		102.27	個人住宅	13年8月	同上
18	岡田遺跡	01-3区	中小路		67.83	個人住宅	13年5月	同上
19	岡田西遺跡	00-1区	岡田		303.00	個人住宅	13年1月	同上
20	中小路北遺跡	00-1区	中小路		188.09	個人住宅	13年3月	同上
21	中小路南遺跡	00-1区	中小路		907.93	倉庫兼作業所	13年2月	同上
22	北野遺跡	01-1区	信達大苗代		176.48	個人住宅	13年4月	同上
23	北野遺跡	99-3区	信達大苗代		4821.49	遊技場	11年9月	同上
24	海会寺跡	01-1区	信達大苗代		100.00	個人住宅	13年4月	同上
25	海会寺跡	01-2区	信達大苗代		140.45	個人住宅	13年5月	同上
26	下村遺跡	01-1区	新家		273.20	個人住宅	13年6月	同上

第3表 試掘調査一覧表

平成13年12月31日現在

No.	遺跡名	位 置	依 頼 者	面積 (㎡)	用 途	調査年月日	備 考
1	範囲外	樽井		1,526.24	分譲住宅	13年1月26日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
2	範囲外	男里		4,096.00	生産施設	13年2月7日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
3	範囲外	信達市場		4,200.72	分譲住宅	13年3月12日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
4	範囲外	信達市場		427.60	倉庫	13年5月10日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
5	範囲外	樽井		806.63	分譲住宅	13年5月11日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
6	範囲外	樽井		319.58	分譲住宅	13年5月15日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
7	範囲外	信達牧野		433.42	分譲住宅	13年5月22日	トレンチ3カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
8	範囲外	信達市場		302.27	分譲住宅	13年6月7日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
9	範囲外	信達市場 信達牧野		428.53	分譲住宅	13年6月7日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
10	範囲外	樽井		475.00	下水管理設	13年6月27日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
11	範囲外	男里		1,782.36	事務所兼倉庫	13年8月8日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
12	範囲外	樽井		492.800	共同住宅	13年8月20日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
13	範囲外	男里		631.26	倉庫併用住宅	13年8月24日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
14	範囲外	新家		1,358.46	分譲住宅	13年8月31日	トレンチ3カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
15	範囲外	新家		480.060	長屋住宅	13年9月25日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
16	範囲外	樽井		967.730	共同住宅	13年9月26日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
17	範囲外	樽井		359.540	倉庫	13年10月9日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
18	範囲外	岡田		25,060.350	宅地分譲	13年10月12日	トレンチ3カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
19	範囲外	岡田		402.240	事務所ビル	13年10月15日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
20	範囲外	新家		14,734.465	援護寮	13年10月23日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
21	範囲外	信達牧野		477.410	倉庫	13年12月6日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
22	範囲外	樽井		1,070.500	宅地造成	13年12月14日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
23	範囲外	信達牧野		2,969.270	分譲住宅	13年12月19日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。

第4表 立会調査一覧表

平成13年12月31日現在

No.	遺跡名	位置	届出又は通知者	面積 (㎡)	用途	調査年月日	備考
1	男里遺跡	男里		132.94	分譲住宅	13年2月8日	遺構・遺物は確認されなかった。
2	男里遺跡	樽井		126.60	ガス	13年2月26日・3月2日	遺構・遺物は確認されなかった。
3	長山遺跡	馬場		134.79	個人住宅	13年3月16日	遺構・遺物は確認されなかった。
4	男里遺跡	男里		231.69	個人住宅	13年3月28日	遺構・遺物は確認されなかった。
5	男里遺跡・男里北遺跡	男里		340.00	道路	13年4月2日	遺構・遺物は確認されなかった。
6	男里遺跡	男里		541.08	個人住宅	13年5月24日	遺構・遺物は確認されなかった。
7	中小路西遺跡	中小路		860.00	浄化槽設置	13年6月4日	遺構・遺物は確認されなかった。
8	男里遺跡	男里		100.370	分譲住宅	13年6月19日	遺構・遺物は確認されなかった。
9	男里遺跡	樽井		969.110	店舗	13年7月9日	遺構・遺物は確認されなかった。
10	中小路西遺跡	中小路		142.630	個人住宅	13年11月13日	遺構・遺物は確認されなかった。
11	男里北遺跡	男里		120.000	農業関連	13年12月14日	遺構・遺物は確認されなかった。
12	上村遺跡	新家		321.30	水道	13年12月19日	遺構・遺物は確認されなかった。
13	男里遺跡	男里		70.000	農業関係	13年12月25日	遺構・遺物は確認されなかった。
14	男里遺跡	男里		87.260	個人住宅	13年12月25日	遺構・遺物は確認されなかった。
15	男里遺跡	男里		133.920	個人住宅	13年12月25日	遺構・遺物は確認されなかった。

## 第2章 男里遺跡の調査

### 第1節 既往の調査

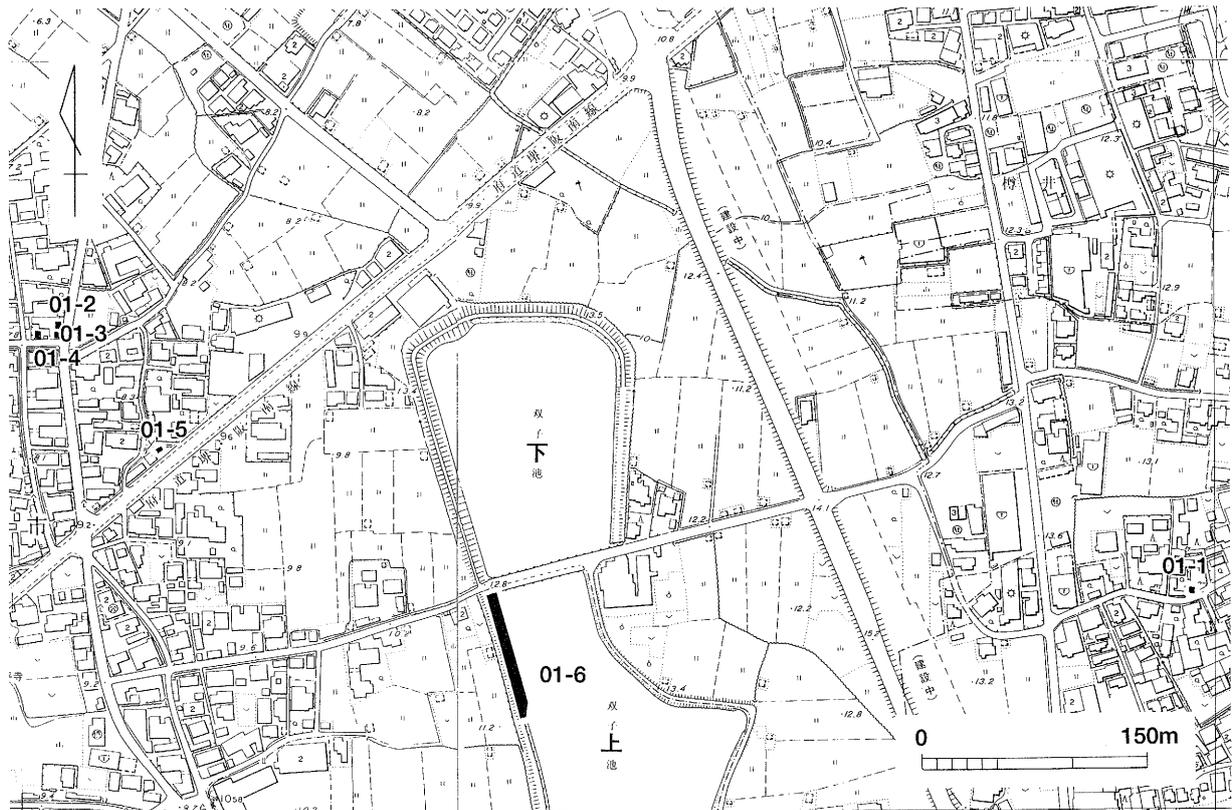
男里遺跡は、市域の北西で阪南市との境を流れる男里川の右岸に位置する。その規模は東西約1.3km、南北約1.5kmを測り、市内最大の規模を誇る遺跡である。現在、遺跡の西側には男里集落、東側には馬場集落が位置し、その間には当遺跡のメルクマールといえる双子上池・下池が所在している。また、近年では関西国際空港へのアクセス道路が開通し、それに伴う大規模な調査も増加しており、のどかな田園風景が広がっていた景観も徐々に失われつつある。

当遺跡は昭和初期に遺物が発見されたことが契機になり、<sup>①</sup>最初の調査が行われ、以後泉南市教育委員会や大阪府教育委員会などの調査が継続的に行われている。その結果、当遺跡が旧石器から近世にいたる複合遺跡であることが判明した。特に弥生時代には泉州地方の代表的な弥生集落のひとつであったことが明らかになってきている。

以下にこれまでの調査の成果を時代ごとに概観する。

旧石器時代では、双子下池でナイフ形石器が採集されている。遺構に伴うものではないが、当遺跡最古の遺物として注目される。<sup>②</sup>

縄紋時代においては、遺跡南東部における調査で中期末から後期初頭の遺物が出土し、<sup>③</sup>北西部では突帯紋土器などの晩期の遺物が出土している。しかし、その集落域などはいまだに未確認であり、今後の調査が期待される場所である。<sup>④</sup>



第1図 男里遺跡調査区位置図

弥生時代では、遺跡の北西部で前期の遺物が<sup>⑤</sup>、また現男里集落の北東端では中期前半の遺物が出土している。中期後半では遺物の質、量ともに増大し、遺跡南東部では大規模な集落が確認されている<sup>⑦</sup>。終末期においては双子池周辺で旧河道の埋土から遺物が出土している。以上、弥生時代においては中期の集落域は判明しているものの、前期及び後期の具体的な様相は明らかにはなっていない。

古墳時代は、遺跡の北部において後期に属する竪穴住居や溝、小石室などが確認されているが、初頭から中期にかけての資料は少なく、今後の資料の蓄積が期待されている。

飛鳥時代から奈良時代においては、遺跡の南東部で竪穴住居や掘立柱建物<sup>⑫</sup>、双子池やその周辺で掘立柱建物<sup>⑬</sup>や旧河道などが確認されている。特に旧河道からは、しがらみ状遺構や墨書土器、土馬などの遺物が出土している。

平安時代には北東部や西部で掘立柱建物などが確認されており、中世では現在の男里集落内の調査で鎌倉時代の掘立柱建物が確認されている<sup>⑮</sup>ほか、多くの柱穴などの遺構が検出されている。このことから現集落の初源が当期であることが推測される。また、遺跡南部では、鍛冶工房を伴う集落が新たに確認されている<sup>⑰</sup>。

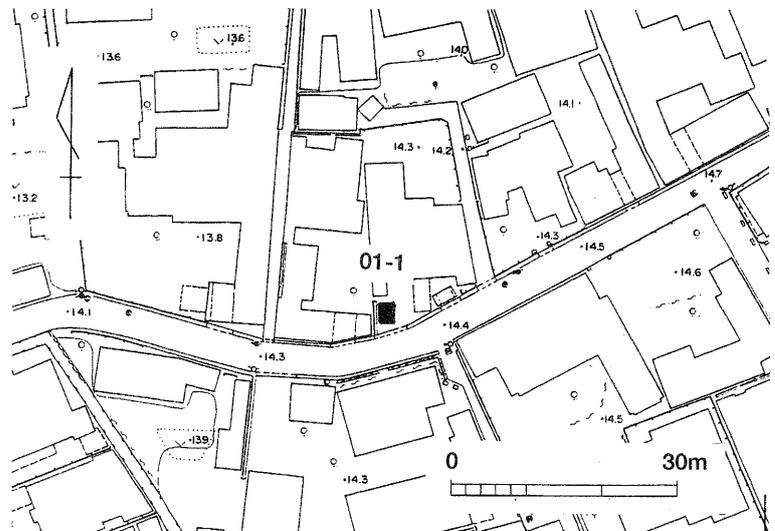
近世においては、中世に形成された景観をほぼ踏襲し発展するようである。近年、製糖に使われたと考えられる遺物が多数出土しており<sup>⑱</sup>、当時の生産業を知る上で興味深い資料が得られている。

以上、これまでの調査で得られた成果を概観したが、皮肉にも遺跡における開発の増加とともに、当遺跡が内包する歴史資料はより一層豊かなものであることが判明してきた。今後の調査の進展で更なるデータの蓄積が進むことが期待されるが、より真摯な姿勢で遺跡と向き合うことが必要となってくるであろう。

## 第2節 男里遺跡01-1区の調査

### 1. 位置 (第1・2図)

調査区は、遺跡の南東端で、地形分類では沖積段丘もしくは氾濫原及び谷底低地にあたる。長山丘陵の西裾に位置する現馬場集落内のほぼ中央部にあたり、調査区北東約100mに位置する長山遺跡96-1区の地山直上で中世の包含層が<sup>⑲</sup>、同じく94-1区では中世の耕作痕やピットなどが確認されている<sup>⑳</sup>。現況は更地で、トレンチは1カ所設定した。



第2図 男里遺跡01-1区地形図

### 2. 層位と遺物の出土状況

(第3・6図)

茶褐色シルト (1層・約40cm) を除去すると、礫混じり茶褐色粘土 (2層・約90cm)、黄褐色粘土

混じり褐色シルト（3層・約20cm）、黄褐色粗砂混じり褐灰色シルト（4層・40cm～）、礫混じり黒褐色シルト（5層・約30cm）と続き、黄褐色粘土（7層）の地山にいたる。1層から5層までは人為的な堆積で、その直下の7層上面でピットを1基検出した。

このうち人為的な堆積は、5層から近世以降と考えられる陶磁器片が出土していることから、近世以降のものと考えられる。検出した遺構面は、直上包含層も遺存しておらず、遺構からも遺物が出土していないため時期は不明である。また、7層上面で検出した遺構面は、直上の5層が人為的な堆積であることから、削平されている可能性も考えられる。

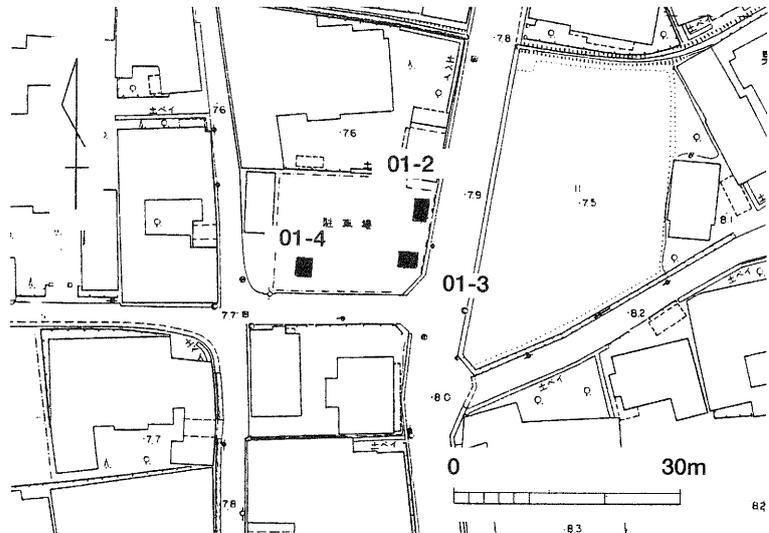
### 3. 遺構（PL. 3・6）

7層上面において、ピット1基を確認した。一部のみでの検出ではあるが、直径約30cm、深さ30cmで、埋土は黄褐色シルトブロック混じり黒褐色シルトである。柱痕は確認されず遺物も出土していない。

## 第3節 男里遺跡01-2区の調査

### 1. 位置（第1・3図）

調査区は遺跡の北部で、地形分類では自然堤防もしくは氾濫原及び谷底低地に位置する。現男里集落の北東端にあたり、本調査区東側に隣接する98-7区では、巨礫を意図的に配置したとも考えられる中世の土坑やピット<sup>21</sup>、北約20mに位置する93-7区では中世の土坑やピットが確認されている<sup>22</sup>。現況は更地で、トレンチは1カ所設定した。



第3図 男里遺跡01-2・3・4区地形図

### 2. 層位と遺物の出土状況

（PL. 3・6）

盛土（1層・約25cm）を除去すると、灰褐色シルト（2層・約5cm）、茶褐色シルト（3層・約10cm）と続き、灰褐色粗砂混じり礫（4層・40cm～）にいたる。いずれの層からも遺物は出土せず、4層上面で精査を行ったが遺構は検出されなかった。

## 第4節 男里遺跡01-3区の調査

### 1. 位置（第1・3図）

調査区は遺跡の北部で、地形分類では自然堤防もしくは氾濫原及び谷底低地に位置する。現男里集落の北東端にあたる。現況は更地で、トレンチは1カ所設定した。

## 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 3・6)

盛土(1層・90cm)を除去すると、褐灰色シルト(2層・約40cm)、黒褐色シルト(3層・約20cm)、黄褐色シルト(4層・約20cm)と続き、灰褐色粗砂混じり礫(5層)にいたる。2・3層より土師器片が出土した。3層及び4層上面で精査を行ったが遺構は確認されなかった。

## 第5節 男里遺跡01-4区の調査

### 1. 位置 (第1・3図)

調査区は遺跡の北部で、地形分類では自然堤防もしくは氾濫原及び谷底低地に位置する。現男里集落の北東端にあたる。現況は更地で、トレンチは1カ所設定した。

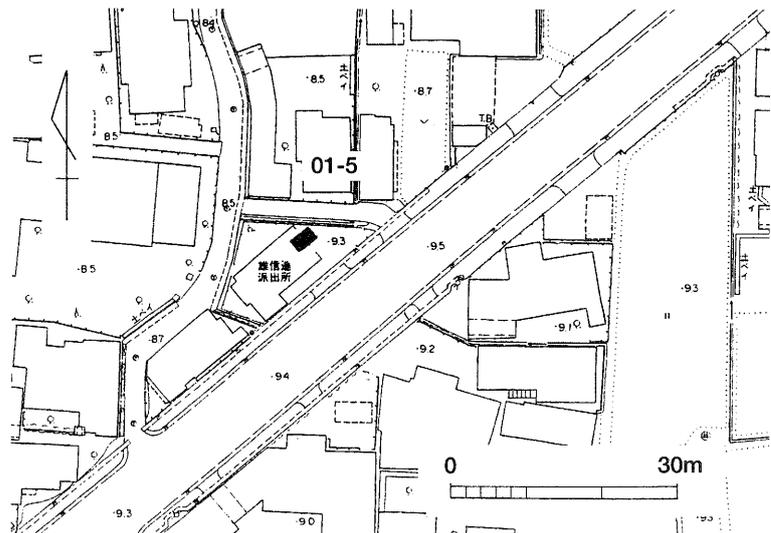
## 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 3・7)

盛土(1～3層・約60～80cm)を除去すると、褐灰色シルト(4層・約10cm)、黒褐色シルト(5層・約30cm)、黄褐色シルト(6層・約50～70cm)と続き、灰褐色粗砂混じり礫(7層)にいたる。3・4層で瓦片など、5層で黒色土器A類が出土している。5層及び6層の上面で精査を行ったが遺構は検出されなかった。

## 第6節 男里遺跡01-5区の調査

### 1. 位置 (第1・4図)

調査区は遺跡の中央部、府道堺阪南線の北側に隣接する地点に位置している。地形分類上では自然堤防、氾濫原及び谷底低地に立地している。周辺ではこれまでに多くの調査が行われており、調査区の北東約100mの地点において、6世紀後半から7世紀前半の小石室<sup>23</sup>、南西約50mでは古墳時代の柱穴<sup>24</sup>などが確認されている。トレンチは1カ所を設定した。



第4図 男里遺跡01-5区地形図

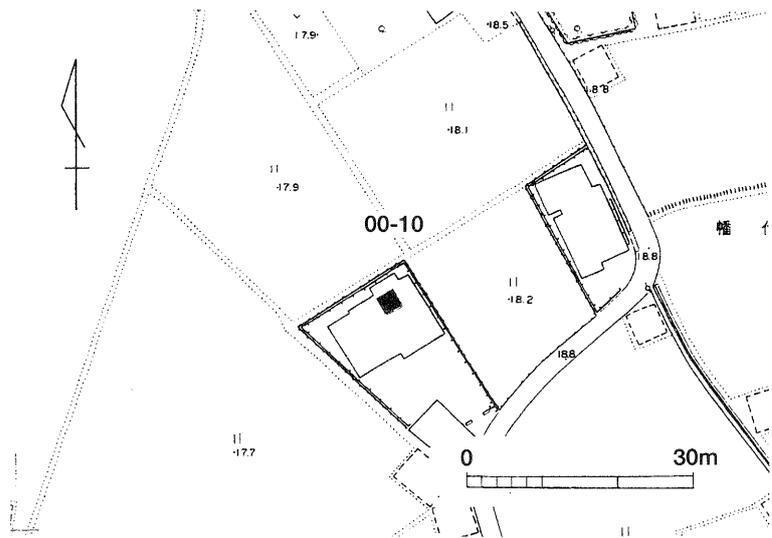
## 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 3・7)

盛土(1層・70～90cm)を除去すると、暗灰色土(2層・30～60cm)が認められ、以下は茶褐色混じり暗黄褐色粘質土の地山にいたる。地山の標高は8.5m前後である。当層をさらに50cmほど掘り下げると砂礫層に達し、湧水が激しくなることから当調査区は旧河道上に位置することが確認できた。遺物・遺構ともに確認できなかった。

## 第7節 男里遺跡00-10区の調査

### 1. 位置 (第5・10図)

調査区は、遺跡の南東部で、地形分類では沖積段丘にあたる。現在、調査区周辺は耕作地として利用されている。近年、遺跡を南北に縦断する府道新設に伴う調査が継続して行われており、中世耕作痕のほか、その下層で弥生時代中期後葉の遺構面が確認されている。本調査区の西側約50mでは方形周溝墓、北西約100mでは掘立柱建物や堅穴住居<sup>⑤</sup>が確認されており付近には当該時期の遺構の存在が想定される。現況は更地で、トレンチは1カ所設定した。



第5図 男里遺跡00-10区地形図

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 3・7)

盛土(1層・約60cm)を除去すると、黒褐色粘質シルト(2層・約20cm)、礫混じり黒褐色粘質シルト(3層・約20cm)と続き、礫混じり黄褐色シルト(4層)にいたる。1層は宅地造成に伴う盛土で、滋味土及び旧耕土層はこの盛土以前に除去されていた。このうち2層及び3層から土器片が検出されたが、いずれも細片のため各層位の帰属時期は決めかねる。2層以下の各層上面において遺構検出を行ったが、遺構は検出されなかった。

- 註 ① 藤岡謙二郎『泉南郡雄信達村弥生遺跡』大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告第12輯(1942)  
 ② 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅳ』(1999)  
 ③ (財)大阪府文化財調査研究センター『男里遺跡 発掘調査資料集(平成四年度～平成十二年度)』(2001)  
 ④ 泉南市教育委員会「男里遺跡95-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIII』(1996)  
 泉南市教育委員会「男里遺跡96-6・7区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIV』(1997)  
 泉南市教育委員会「男里遺跡・Ⅱ」『泉南市文化財年報No.1』(1995)  
 ⑤ 遺跡南東部の弥生時代中期の集落が確認されている地点。1982年度の泉南市教育委員会による調査。  
 ⑥ 泉南市教育委員会「男里遺跡95-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIII』(1996)  
 ⑦ ③と同じ。  
 ⑧ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅰ』(1997)  
 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅱ』(1997)  
 ⑨ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』(2002)  
 ⑩ 泉南市教育委員会「男里遺跡92-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』(1993)  
 ⑪ 泉南市史編纂委員会『泉南市史通史編』(1987)。現在、市立雄信達小学校に移設。  
 ⑫ 泉南市教育委員会「男里遺跡96-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIV』(1997)  
 ⑬ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』(1978)  
 ⑭ ③と同じ。  
 ⑮ (財)大阪府埋蔵文化財協会『男里遺跡』(1993)  
 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』(1978)  
 泉南市教育委員会「男里遺跡95-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIII』(1996)  
 ⑯ 泉南市教育委員会「男里遺跡55-1区の調査」『男里遺跡発掘調査報告書Ⅱ』(1981)

- ⑰ ③と同じ。
- ⑱ 泉南市教育委員会「男里遺跡97-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XV』(1998)  
泉南市教育委員会「光平寺跡97-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XVI』(1999)  
泉南市教育委員会「男里遺跡97-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XV』(1998)
- ⑲ 泉南市教育委員会「長山遺跡96-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XV』(1998)
- ⑳ 泉南市教育委員会「長山遺跡94-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XII』(1995)
- ㉑ 泉南市教育委員会「男里遺跡98-7区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XVII』(2000)
- ㉒ 泉南市教育委員会「男里遺跡93-7区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XII』(1995)
- ㉓ ⑦と同じ
- ㉔ ⑧と同じ
- ㉕ ③と同じ

## 第3章 戎畑遺跡の調査

### 第1節 既往の調査

遺跡は現樽井集落の西側に位置し、地形分類では遺跡北東部が沖積段丘低位面であるほかは、そのほとんどが氾濫原及び谷底低地にあたる。近年宅地化が進んでいるが、それ以前はほとんどが耕作地であった。本遺跡内における調査は下記の区画整備事業以降、同地区内における開発行為に伴うものがほとんどであり、各調査区相互の関連性が他の遺跡に比べ捉えやすい。

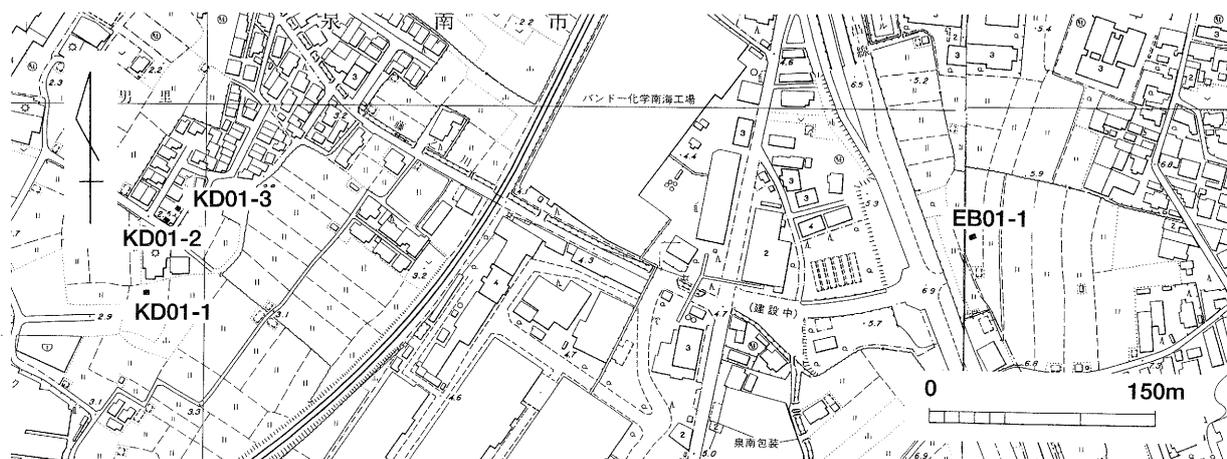
平成7年度から平成8年度にかけて土地区画整備に伴う発掘調査が行われ、平安時代の灌漑水路と考えられる溝や、中世の集落が確認されている(95-1区)<sup>①</sup>。このうち灌漑水路と考えられる溝は、幅約4m、深さ0.5m、検出長約100mの大規模なものもあり、少なくとも13世紀頃には埋没したと考えられる。この灌漑水路を経営した主体が問題になるが、時期的には男里遺跡で確認された10世紀後半の掘立柱建物に対応する<sup>②</sup>。さらに、この水路がどこから水を引き、どの範囲の灌漑用水をまかなったかが問題となる。検出された水路は原地形のコンターラインにほぼ平行するものと斜めに交差するものがあるが、現在機能する水路網を参考にすると、長山丘陵付近で金熊寺川から取水し長山丘陵西裾をとおり遺跡北西部一帯の灌漑用水をまかなっていたと考えられる<sup>③</sup>。

このほか、12世紀後半代から15世紀頃までの、掘立柱建物や土坑墓のほか、真蛸壺の焼成坑などが確認されている。このうち、土坑墓では和鏡や灰釉陶器が出土しているほか、関連する施設として火葬施設と考えられる焼土坑もみられる。真蛸壺の焼成坑は径5m程の不整形円形を呈するもののほか、長楕円形で所謂ロストルをもつものもある。このような中世における真蛸壺の焼成坑は、隣接する男里遺跡<sup>④</sup>や樽井南遺跡<sup>⑤</sup>でも確認されており、当時この地域における一般的な生業であったと想定できる。

### 第2節 01-1区の調査

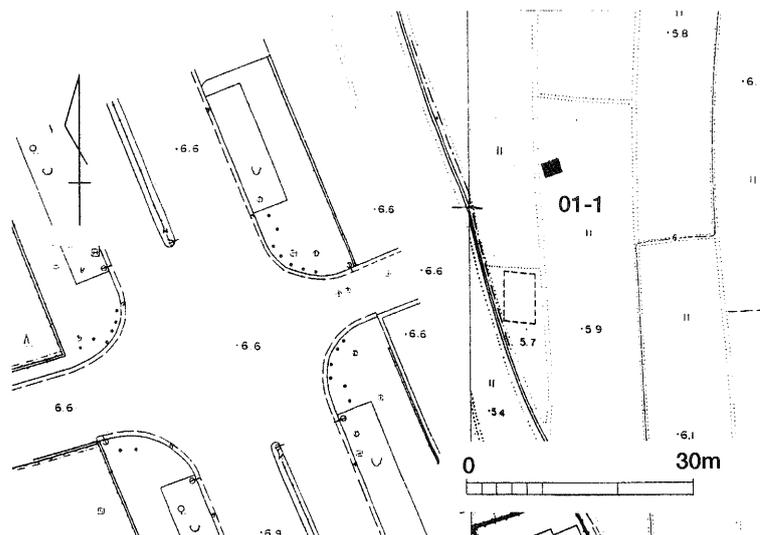
#### 1. 位置 (第6・7図)

調査区は、遺跡のほぼ中央部で、地形分類では沖積段丘もしくは氾濫原及び谷底低地にあたる。平成



第6図 戎畑遺跡・高田遺跡調査区位置図

7年から平成8年にかけて行われた95-1区<sup>⑥</sup>では、平安時代中頃以降の灌漑施設と考えられる溝、12世紀から13世紀にかけての集落などが確認されている。本調査区は、この95-1区に隣接しており、相互に関連性のある遺構の検出が想定された。トレンチは1カ所設定した。



第7図 我畑遺跡01-1区地形図

## 2. 層位と遺物の出土状況

(PL. 3・8)

盛土（1層・約120cm）を除去すると暗青灰色シルト（2層・約10cm）、

灰褐色シルト（3層・約10cm）、茶褐色シルト（4層・20cm）、と続き、礫混じり黄褐色シルト（6層）の地山にいたる。1層は宅地造成に伴う盛土で、2層は造成以前の耕作土層、4層が包含層である。

地山である6層上面で溝を検出した。4層から、土師器片が出土しているものの、遺構埋土（5層）からは出土していない。なお、95-1区では、4層上面で耕作痕などの遺構が確認されているが、本調査区では検出されなかった。

## 3. 遺構（PL. 3・8）

6層上面において、溝を確認した。SD01は、一部のみの検出ではあるが、検出長約90cm、深さ20cmで、ほぼ南北方向にのびるものと考えられる。埋土は黒褐色シルトで、遺物は出土していない。95-1区の調査成果と対照すると、本遺構は同地区で確認された灌漑水路の一部と位置づけることができよう。

- 註 ① 泉南市教育委員会『我畑遺跡発掘調査現地説明会資料』（1996）  
 城野博文「泉南市我畑遺跡の調査」『大阪府埋蔵文化財研究会（第35回）資料』（財）大阪府文化財調査研究センター（1997）  
 泉南市教育委員会「我畑遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』（1998）  
 ②（財）大阪府埋蔵文化財協会『男里遺跡』（1993）  
 ③ 泉南市教育委員会「泉南市域における灌漑体系の変遷について」『上代石塚遺跡発掘調査報告書』（2001）  
 ④ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』（2002）  
 ⑤ 泉南市教育委員会「樽井南遺跡96-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIV』（1997）

## 第4章 高田遺跡の調査

### 第1節 既往の調査

遺跡は、男里川河口右岸、現男里集落の北側に位置する。地形分類では、その大部分が旧河道、氾濫原及び谷底低地で、遺跡西部の一部にのみ自然堤防がみられる。近年宅地化が進むものの、以前は遺跡の範囲内はほぼ耕作地であった。

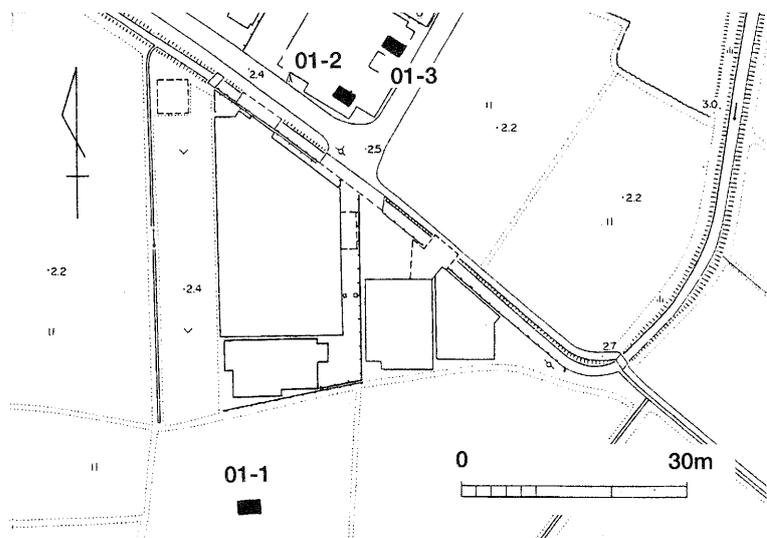
これまでの調査は、遺跡の北西部で行われており、このうち92-1区で中世の耕作痕が検出され、その直下の砂礫層が須恵器や弥生土器を含む包含層であることが確認されている<sup>①</sup>。

地形分類図やこれまでの調査成果をみて明らかなように、遺構が確認されている中世以前は遺跡のほとんどが非常に不安定な地域であったと考えられる。しかし、本遺跡を含む一帯は男里川流域では数少ないまとまった面積をもった沖積地でもあり生産域として利用された可能性も想定できる。

### 第2節 高田遺跡01-1区の調査

#### 1. 位置 (第6・8図)

調査区は、遺跡の北東部で、地形分類では旧河道もしくは氾濫原及び谷底低地にあたる。本調査区の西側約20mに位置する92-1区では、中世の耕作痕が確認され、その下層の砂礫層から須恵器や弥生土器が出土している<sup>②</sup>。トレンチは1カ所設定した。



第8図 高田遺跡01-1・2・3区地形図

#### 2. 層位と遺物の出土状況

(PL. 3・8)

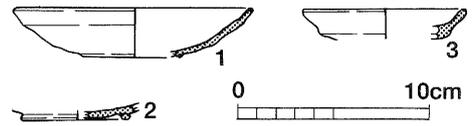
盛土(1層・約70cm)を除去すると、黒褐色シルトに黄灰色シルトブロックが混入(2層・約20cm)、黄灰色シルト(3層・約20cm)、灰褐色粘質シルト(4層・約30cm)、灰色細砂混じり灰褐色シルト(5層・約40cm)と続き、礫混じり灰色粗砂(6層)にいたる。

2～4層は旧耕作土層、5層以下は河川堆積と考えられる。このうち、3層から瓦器椀、5層から須恵器や瓦器が出土している。また、6層上面で木片などを検出したが湧水のため掘削を中止した。ただ92-1区の調査成果と、本調査区5層の出土遺物の時期を考えあわせると、6層以下で遺物が検出される可能性は高い。

4・5・6層上面にて精査を行ったが遺構は検出されなかった。

### 3. 遺物 (PL. 15、第9図)

図示したのはすべて5層出土の遺物で瓦器碗・皿であるが、このほかに須恵器片も出土している。1は瓦器碗である。口径12.6cm。摩耗が激しく調整は確認できない。2は瓦器碗である。高台径5.8cm。内外面ともナデ調整で仕上げる。3は瓦器皿である。口縁端部内外面はヨコナデ、底部外面はユビオサエで仕上げる。これらの遺物から、5層はおおよそ14世紀代と考えられる。



第9図 高田遺跡01-1区出土の遺物

## 第3節 高田遺跡01-2区の調査

### 1. 位置 (第6・8図)

調査区は、遺跡の北東部で、地形分類では旧河道もしくは氾濫原及び谷底低地にあたる。本調査区の西側約50mにあたる92-1区では、砂礫層から須恵器や弥生土器などが出土している<sup>③</sup>一方で、それに隣接する95-1区では遺構及び遺物とも確認されておらず<sup>④</sup>、付近の堆積が単純でないことが想定できる。調査区は更地で、トレンチは1カ所設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 3・8)

盛土(1層・約70cm)を除去すると、黒褐色シルト(2層・約10cm)、褐灰色シルト(3層・約5cm)、礫混じり灰色粗砂(4層・約30cm)と続き、黄褐色粗砂(5層)にいたる。

2・3層は宅地化以前の耕作土層、4層は河川の氾濫作用に起因する土層と考えられる。なお、今回の調査では5層を検出した時点で湧水が激しく掘削を中止した。このうち、2・3層上面にて遺構検出を行ったが確認されず、遺物も出土しなかった。

## 第4節 高田遺跡01-3区の調査

### 1. 位置 (第6・8図)

調査区は、遺跡の北東部で、地形分類では旧河道もしくは氾濫原にあたる。01-2区と隣接しており、過去の調査区とも近接した位置関係にある。調査区は更地で、トレンチは1カ所設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 3・9)

盛土(1層・約70cm)を除去すると、灰褐色粘質シルト(2層・約10cm)、褐灰色粘質シルト(3層・約10cm)と続き、灰色粗砂混じり礫層(4層)にいたる。

2・3層は宅地化以前の旧耕作土層、4層は河川の氾濫作用に起因する土層と考えられる。このうち、3・4層上面にて遺構検出を行ったが確認されず、遺物も出土しなかった。

註 ① 泉南市教育委員会「高田遺跡92-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』(1993)

② ①と同じ

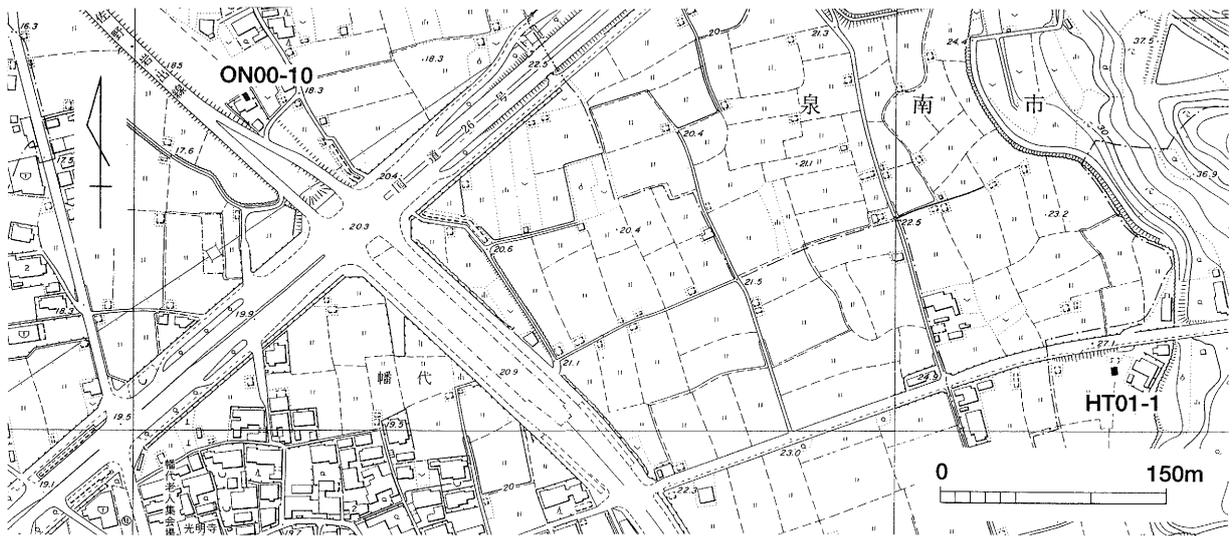
③ ①と同じ

④ 泉南市教育委員会「高田遺跡95-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIII』(1996)

## 第5章 幡代遺跡の調査

### 第1節 既往の調査

幡代遺跡は男里遺跡の南方、金熊寺川右岸に立地する。遺跡の現況は近年新設された府道を境として西側に幡代集落が位置し、東側は耕作地が大きくひろがっている。当遺跡は以前から住宅の建て替えに伴う小規模な調査とともに、近年では前述した府道建設などによって大規模な調査が行われている<sup>①</sup>。これらの調査から当遺跡は弥生時代以降、特に平安後期、室町、江戸後期の3時期にその盛期が認められており、市内の中世期以降の歴史を語る上で欠くことのできない貴重な資料を提供している。



第10図 男里遺跡・幡代遺跡調査区位置図

### 第2節 幡代遺跡01-1区の調査

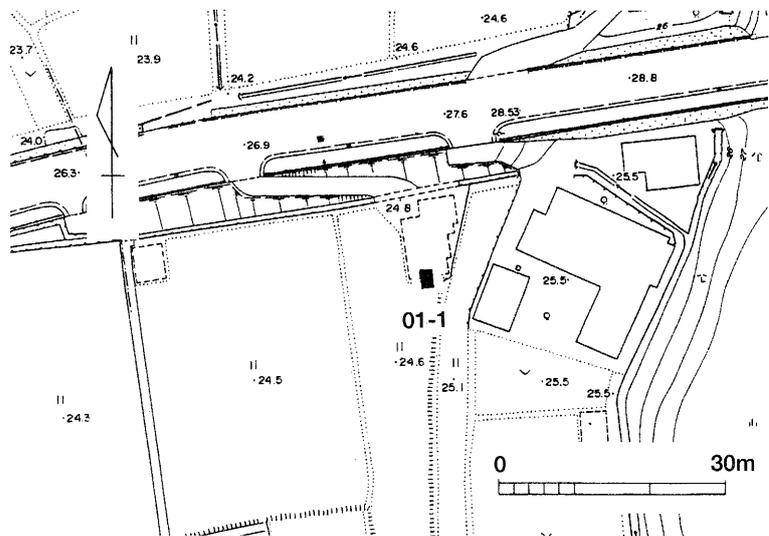
#### 1. 位置 (第10・11図)

調査区は、遺跡の南東部に位置し、地形分類では沖積段丘上に立地している。当調査区は遺跡内においても調査例が少なく、遺構のひろがりなど不明な点が多い地点である。トレンチは1カ所設定した。

#### 2. 層位と遺物の出土状況

(PL. 3・9)

盛土(1層・約80cm)を除去すると、茶褐色ブロック混じり暗褐色土(2層・約20cm)、暗褐色土(3層・



第11図 幡代遺跡01-1区地形図

約10cm) と続き、地山の礫混じり赤褐色土の地山にいたる。各層ともにほぼ水平に堆積し、地山の標高は24.1m前後である。遺構・遺物は確認できなかった。

註 ① 1993年度の(財)大阪府埋蔵文化財協会の調査。

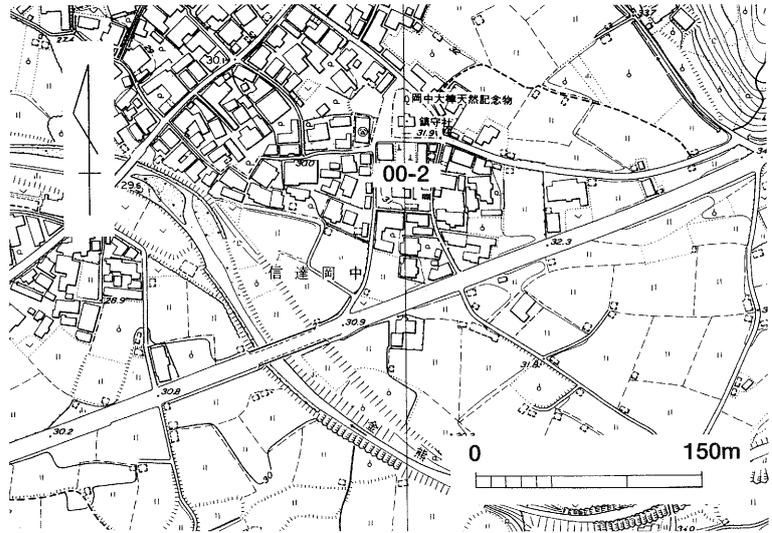
(財)大阪府文化財調査研究センター「調査概略集-幡代南遺跡-」『大阪府下埋蔵文化財研究会(第30回)資料』(1994)  
泉南市教育委員会「幡代遺跡」『泉南市文化財年報No.1』(1995)

## 第6章 岡中遺跡の調査

### 第1節 既往の調査

遺跡は、現岡中集落とほぼ重複し、地形分類では沖積段丘に位置する。集落内の鎮守社には樹齢数百年の楠と榎があるほか、集落内を北東から南西に縦断する道は熊野街道<sup>①</sup>に比定されている。

このような現況から類推される集落の様相を示す資料が確認されている。平安時代末頃の寺院跡<sup>②</sup>、室町時代の土坑墓<sup>③</sup>、鍛冶関連施設のほか、遺跡の北東約100mに位置する林昌寺瓦窯<sup>④</sup>などである。このほか、隣接する岡中西遺跡では室町時代の井戸より呪符<sup>⑤</sup>がみついている。



第12図 岡中遺跡調査区位置図

### 第2節 岡中遺跡00-2区の調査

#### 1. 位置 (第12・13図)

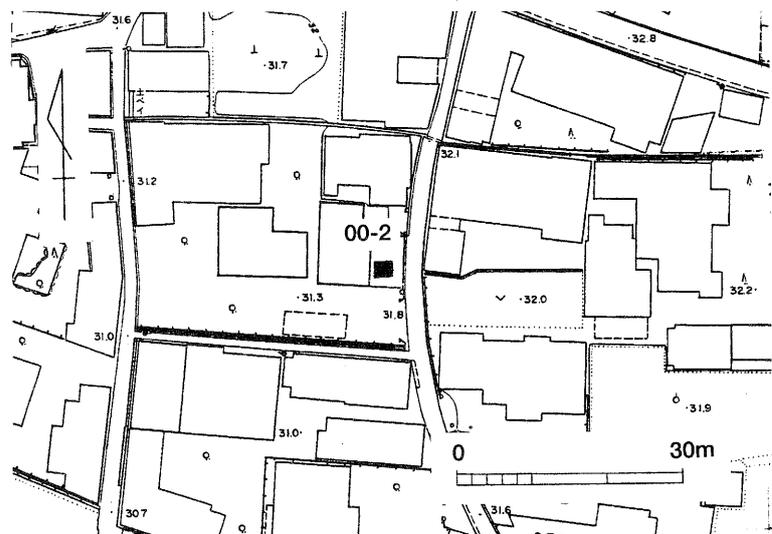
調査区は、遺跡の中央部で、地形分類では沖積段丘にあたる。現岡中集落内の南部にあたり、付近では北約30mの地点で平安時代末頃の瓦類が出土している。現況は更地で、トレンチは1カ所設定した。

#### 2. 層位と遺物の出土状況

(PL. 4・9)

盛土(1層・約40cm)を除去すると、褐灰色シルト(2層・約10cm)、明橙色シルト(3層・約10cm)、礫混じり褐灰色粗砂(4層・約10cm)、褐灰色粗砂(5層・約10cm)と続き、礫混じり褐灰色粗砂(6層・20cm～)にいたる。

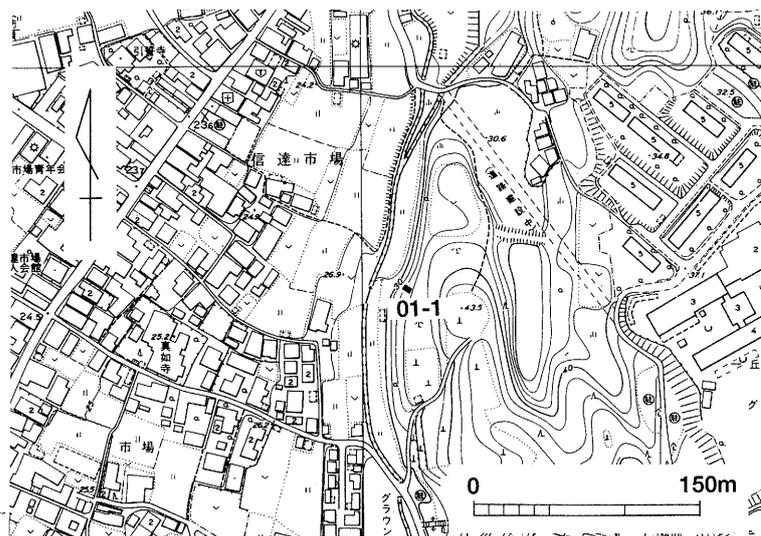
1～4層は宅地に伴う盛土、6層は河川の氾濫に起因する自然堆積層と考えられる。いずれの層位か



第13図 岡中遺跡00-2区地形図

らも遺物が出土しなかったため、盛土及び河川堆積を呈する層位の年代は不明である。また、2層及び3層上面において遺構検出を行ったが、遺構は確認されなかった。

- 註 ① 大阪府教育委員会『熊野・紀州街道論考編 - 歴史の道調査報告書第1集-』(1987)  
 ② 1987年度の泉南市教育委員会による調査。  
 ③ ②と同じ  
 ④ 泉南市教育委員会『林昌寺瓦窯』『泉南市文化財年報No.1』(1995)  
 ⑤ 泉南市教育委員会『岡中西遺跡』『泉南市文化財年報No.1』(1995)  
 ⑥ ②と同じ

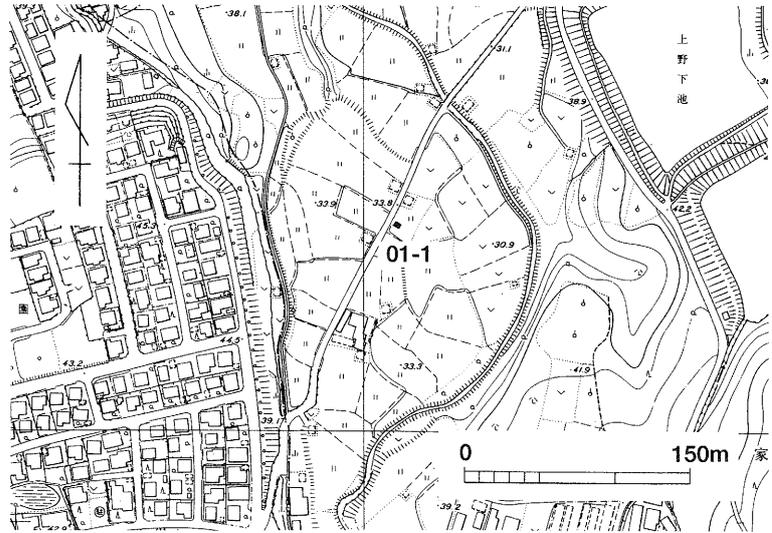


第14図 市場遺跡調査区位置図

## 第7章 芋掘遺跡の調査

### 第1節 既往の調査

遺跡は、市域の北東部、檜井川に合流する柳谷川流域の谷間に位置し、地形分類では洪積段丘低位面にあたる。遺跡内及びその周辺において、市内に点在するおそらく中世以降から存続するような旧集落はない。遺跡として周知されている範囲は耕作地として利用されている。遺跡の南西及び北東の丘陵は新興住宅地の開発が行われる以前は山林であった。遺跡発見の契機は、泉南市教育委員会による分布調査であり、中世以降の散布地として周知されている。この調査では、当該時期の遺物が採集されたが、それ以降は調査が行われることはなく、今回がはじめてのものとなる。



第15図 芋掘遺跡調査区位置図

遺跡及びその周辺について、これまで確認されている文献及び考古資料は少ない。

13世紀末から16世紀末までの新家川流域の新家谷における土地利用の変遷についての記録である『日輪山清明寺代々記并三谷古記』によると、1360年に大池築造の記録があるなど、14世紀以降に新家谷の開発が活発になったとされている。その後、新家川流域の野口、高野、別所に開発がおよぶと記されているものの、当遺跡周辺における記録はみられない。

遺跡南東約1kmの丘陵における宅地開発で確認された宮遺跡及び宮南遺跡において、弥生時代中期の土器やサヌカイトの剥片が確認されている<sup>②</sup>以外は、石ヶ原遺跡など隣接する遺跡はいずれも分布調査により発見された中世の散布地である。いずれの遺跡も発見後、本格的な調査は行われていないので、内容は現在のところ明確ではない。

### 第2節 01-1区の調査

#### 1. 位置 (第15・16図)

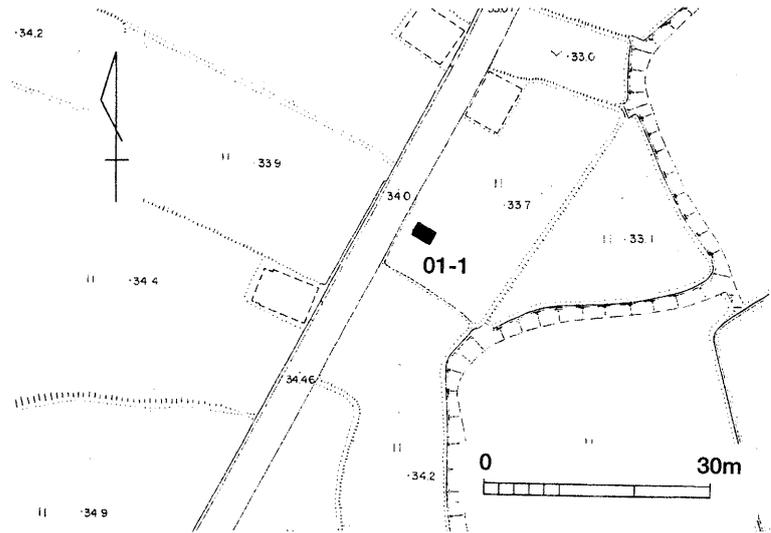
調査区は、遺跡の西部で、地形分類では洪積段丘低位面にあたる。今回の調査は、周知の遺跡となつてから、はじめての調査である。周囲の地形をみると丘陵谷間を段状に耕地化しており、その部分が遺跡の範囲となっている。現況は更地で、トレンチは1カ所設定した。

#### 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 4・10)

盛土（1層・約40cm）を除去すると黒褐色シルト（2層・約10cm）、褐灰色シルト（3層・約20cm）と続き、黄褐色シルト（4層）の地山にいたる。1層は宅地造成に伴う盛土で、2・3層は造成前の耕作土層、4層上面が遺構面となる。いずれの層からも遺物は出土しなかった。

### 3. 遺構（PL. 4・10）

4層上面において、ピットを確認した。直径約30cm、深さ10cmで、柱痕は確認できなかった。埋土は灰褐色シルトで、遺物は出土していない。



第16図 芋掘遺跡01-1区地形図

註 ① 泉南市史編纂委員会「第3章 戦国時代の泉南地方」『泉南市史 通史編』（1987）  
 ② 平成9・10年度の泉南市教育委員会による調査。

## 第8章 岡田遺跡の調査

### 第1節 既往の調査

遺跡は樫井川左岸の下流域に位置し、地形分類では洪積段丘低位面にあたる。遺跡の北東部のごく一部が現岡田集落に含まれるほかは、大半が耕作地として利用されている。現在の岡田集落は、岡田浦ともいう。近世に回船業や漁業で賑わい、19世紀代には製糖業にかかる甘蔗栽培も行われていたようである<sup>①</sup>。

これまでの調査は、現岡田集落縁辺の遺跡北東部で行われたものが多い。90-3区では凹基無茎石鏃<sup>②</sup>、90-2区では古代の須恵器が確認されているが、これまで確認されているものは中世以降がその大半を占める。現岡田集落内では、97-1・2区において掘立柱建物の一部と考えられる柱穴<sup>④</sup>や、90-1区では瓦を廃棄した土坑<sup>⑤</sup>などが確認されている。遺跡の大半を占める耕作地では、耕作痕が確認されている。これらの耕作痕は、包含層や隣接する岡田西遺跡、氏の松遺跡の調査成果<sup>⑥</sup>から少なくとも12世紀以降のものであろう。

### 第2節 01-1区の調査

#### 1. 位置 (第17・18図)

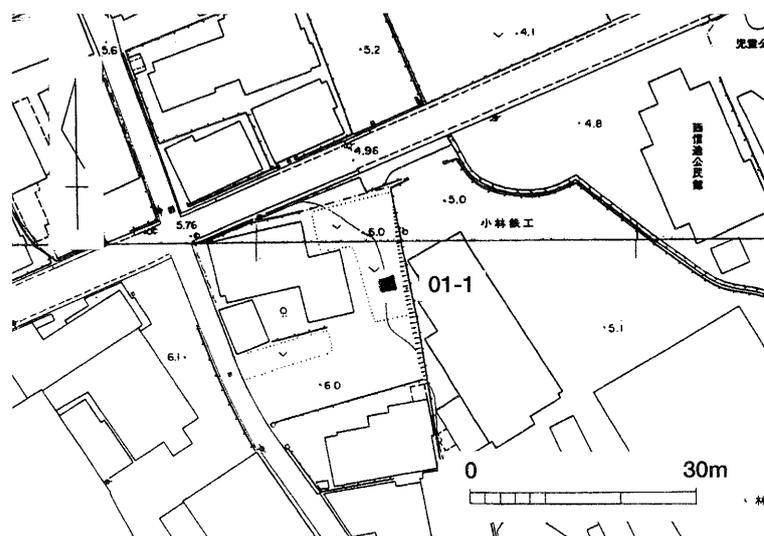
調査区は、遺跡の北部で、地形分類では洪積段丘低位面に位置する。現岡中集落内の南部にあたり、近接する99-1区、97-1・2区<sup>⑦</sup>などでは中世以降の遺構や遺物が確認されている。現況は更地で、トレンチは1カ所設定した。

#### 2. 層位と遺物の出土状況

(PL. 4・10)

盛土(1層・約50cm)を除去すると、黒褐色シルト(2層・約5cm)、褐灰色シルト(3層・約20cm)、褐灰色シルトに赤褐色粒が混入(4層・約20cm)、黒褐色シルト(5層・約10cm)と続き、黄褐色粘土(6層)にいたる。

2～4層は旧耕作土、5層はそれ以前の自然堆積と考えられ、土師器片などが出土している。この5層は南東方向にレベルを下げており、現在の地形に即した堆積状況を呈する。なお、4・5・6層上面において遺構検出を行ったが、遺構は確認されなかった。



第17図 岡田遺跡01-1区地形図

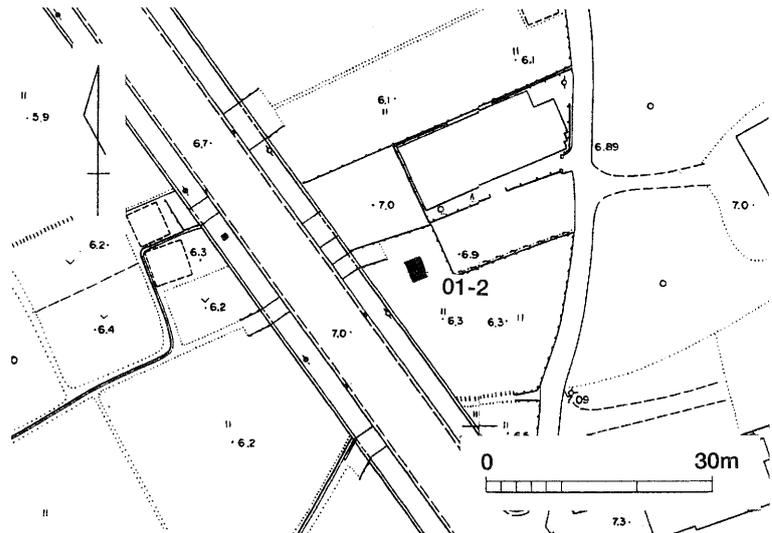


第18図 岡田遺跡・岡田西遺跡・中小路北遺跡・中小路南遺跡調査区位置図

### 第3節 01-2区の調査

#### 1. 位置 (第18・19図)

調査区は、遺跡の北東部で、地形分類では洪積段丘低位面に位置する。現岡田集落内の南側にあたり、近接する95-2区では中世以降の耕作痕や流路などの遺構が確認されている<sup>⑧</sup>。現況は更地で、トレンチは1カ所設定した。



第19図 岡田遺跡01-2区地形図

#### 2. 層位と遺物の出土状況

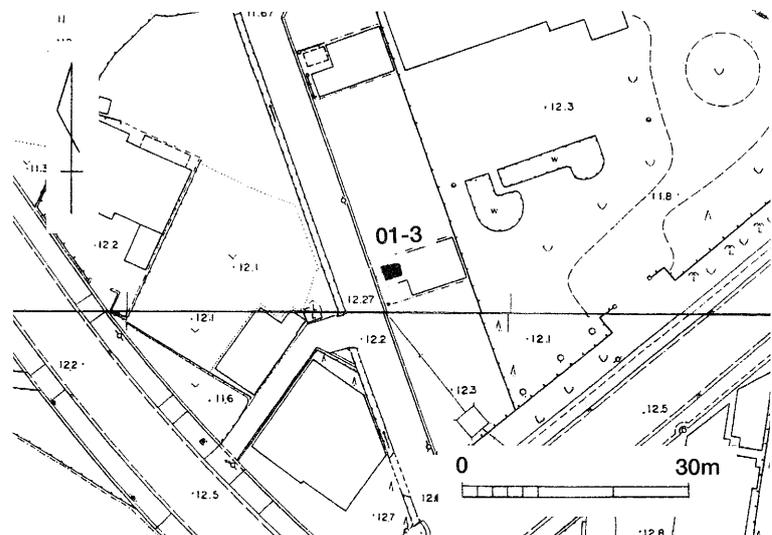
(P L. 4・10)

盛土(1層・約50cm)を除去すると、灰色粗砂(2層・約20cm)、灰色粘質シルトブロック混じり褐灰色粘質シルト(3層・約40cm)、黄褐色粘土(5層・約20cm)、黒褐色粘質シルトと灰色細砂が互層に堆積(6層・約30cm)、青灰色粗砂(7層・約10cm)と続き、礫混じり青灰色粗砂(8層)にいたる。2・3層は耕作土層、5層は客土と考えられ、この5層上面で4層を埋土とする遺構が検出されている。6・7層は河川堆積を呈し、このうち6層にラミナがみられることから、流路などの埋土といえ、95-2区で確認されたもの同一の遺構であると考えられる。3・7層から土師器質土器片が出土しているものの、明確な時期を特定できるような資料ではない。

### 第4節 01-3区の調査

#### 1. 位置 (第18・20図)

調査区は遺跡の南西部で、地形分類では洪積段丘低位面に位置する。現岡田集落の南側約300mの地点にあり、付近には耕作地がひろがる。本遺跡内における付近での調査例はなく、遺構及び遺物の遺存状況が不明確な地点である。周辺では、隣接する岡田西遺跡において中世以降近世にかけての耕作痕及び灌漑遺構などが確認されている。現況は更地で、トレンチは1カ所設定した。



第20図 岡田遺跡01-3区地形図

## 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 4・10)

盛土（1層・約40～80cm）を除去すると、青灰色細砂（2層・約10cm）、褐灰色シルト（3層・約20cm）、黄褐色シルト（4層・約20cm）と続き、黄褐色粘土（5層）にいたる。

3・4層は旧耕作土、5層は地山で、2層は3層をベースとする落ち込みの埋土と考えられる。遺物は、2層から近世以降の陶磁器片、4層から瓦器片が出土している。

3層をベースとする落ち込みがいかなる性格のものであるか、一部のみの検出であるため明確には判断しかねるが、埋土である2層が還元色を呈する細砂であることから、水路もしくは野井戸のような遺構ではないかと考えられる。なお、この落ち込みの肩に約40cm程の間隔で打ち込まれた木杭列が確認された。

- 註 ① 泉南市史編纂委員会「第3章 交通と産業」『泉南市史 通史編』（1987）  
② 泉南市教育委員会「岡田遺跡90-3区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書IX』（1992）  
③ 泉南市教育委員会「岡田遺跡90-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書IX』（1992）  
④ 泉南市教育委員会「岡田遺跡97-1・2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIV』（1997）  
⑤ 泉南市教育委員会「岡田遺跡90-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書IX』（1992）  
⑥ 泉南市教育委員会『岡田西・氏の松遺跡発掘調査報告書』（1995）  
⑦ 泉南市教育委員会「岡田遺跡97-1・2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIV』（1997）  
泉南市教育委員会「岡田遺跡99-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XVII』（2000）  
⑧ 泉南市教育委員会「調査の経過」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIV』（1997）  
⑨ ⑥と同じ

## 第9章 岡田西遺跡の調査

### 第1節 既往の調査

遺跡は市域の北部で、現在の岡田集落と中小路集落の間に位置し、地形分類では洪積段丘低位面にあたる。遺跡は、住宅などの建物が点在する程度で、大半が耕作地である。

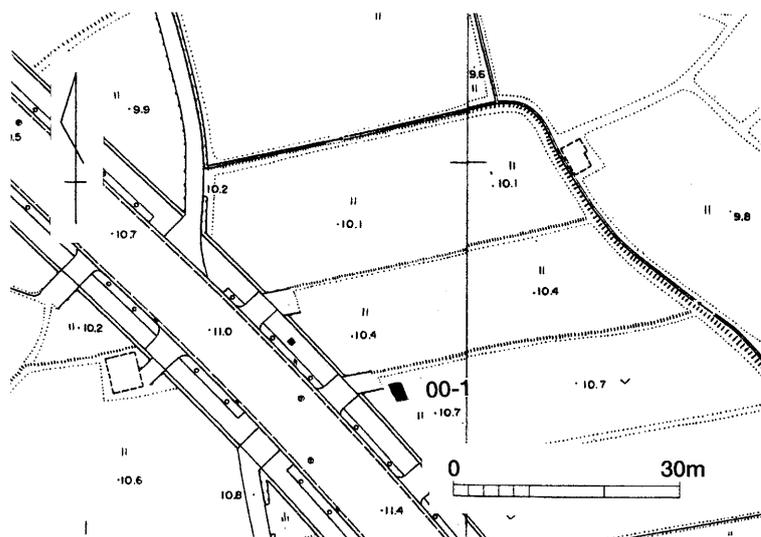
市道新設に伴い発見された遺跡<sup>①</sup>で、発見の契機となった試掘調査も含めれば今回の調査が3件目となる。なお、この試掘調査では、縄紋時代晩期の突帯文土器が確認されている。

市道新設に伴う調査では、中世の溝や井戸などの灌漑施設が確認されているが、この調査成果から14世紀末を境に溝から井戸への灌漑施設の変換が指摘できる。溝は、コンターラインに直交したかたちで、ほぼ南北方向にのびる。12世紀末に掘削され14世紀末に埋没したとされ、規模は大きいもので幅3m、深さ1.3m、小さなもので幅0.4m、深さ0.1mである。このように溝の規模には大小がみられるが、この規模の相違が、溝の主軸・方向性に反映されていないので、大きいものが基幹で小さなものが分水と考えるより、ある程度の時間差がありその時期により溝の規模に差異があった可能性が高い。また、野井戸と考えられる遺構は14世紀末以降に掘削されている。規模は直径5mの不整円形で深さは1m前後である。これに幅約0.6m、深さ約0.1mの浅い溝がとりつくものもある。

### 第2節 00-1区の調査

#### 1. 位置 (第18・21図)

調査区は、遺跡の北東部で、地形分類では洪積段丘低位面にあたる。現在、調査区周辺は耕作地として利用されている。近年、調査区に隣接する市道新設に伴う調査が行われている<sup>②</sup>。この調査は、遺跡を南北に縦断するもので、近世及び中世の耕作痕や水路及び井戸などが確認されている。現況は更地で、トレンチは1カ所設定した。



第21図 岡田西遺跡00-1区地形図

#### 2. 層位と遺物の出土状況

(PL. 4・11)

黒褐色シルト (1層・約10cm) を除去すると、マンガン混灰白色シルト (2層・約10cm)、黄灰色シルト (3層・約20cm) と続き、黄褐色粘土 (4層) にいたる。1層は現代耕作土で、3層は旧耕作土と考えられる。3層から中世の真蛸壺と考えられる土師質の土器片が出土した。4層及び5層上面で遺構検出を行ったが、4層上面において耕作痕2条を検出した。埋土はいずれも灰白色シルトである。

### 3. 遺構 (PL. 4・11)

4層上面において、溝2条を確認した。いずれも北西から南東方向にほぼまっすぐにのび、両者は共に平行している。埋土は灰白色シルトで、遺物は出土していない。埋土の状況と検出状況から耕作痕と考えられる。

註 ① 泉南市教育委員会『岡田西・氏の松遺跡発掘調査報告書』(1996)

② ①と同じ

## 第10章 中小路北遺跡の調査

### 第1節 既往の調査

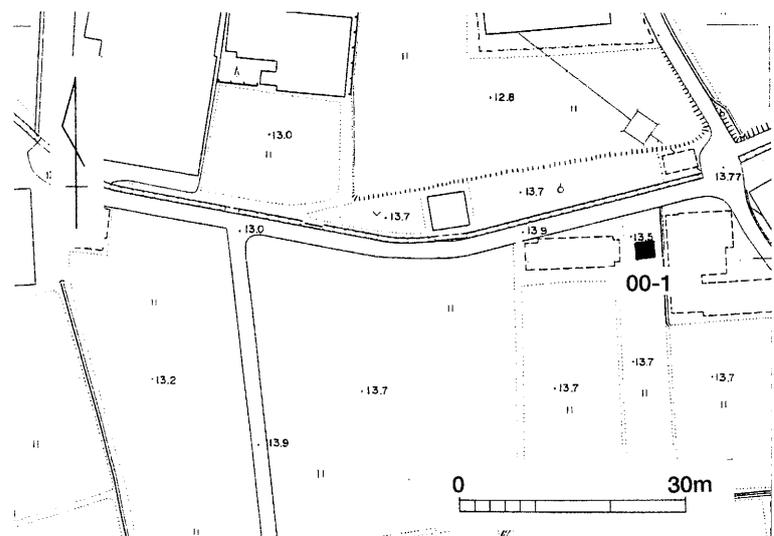
遺跡は現中小路集落の南部に位置し、地形分類では洪積段丘低位面にあたる。遺跡の北東部は中小路集落が含まれ、南西部は耕作地として利用されている。泉南市教育委員会による分布調査で確認された遺跡で、中世の散布地として周知されている。今回の調査は、周知されて以後はじめての例となる。

隣接する新伝寺遺跡では室町時代の区画施設を伴う掘立柱建物<sup>①</sup>、北野遺跡では平安時代後期の桁行ないし梁行が7間の規模をもつ掘立柱建物<sup>②</sup>が確認されており、本遺跡においても中世集落の存在が想定できる。

### 第2節 00-1区の調査

#### 1. 位置 (第18・22図)

調査区は、遺跡の中央部で、地形分類では洪積段丘低位面に位置する。現中小路集落の南西のはずれにあたり、付近には耕作地がひろがっている。今回の調査は、本遺跡が周知されて以来、はじめての調査である。現況は耕地で、トレンチは1カ所設定した。



第22図 中小路北遺跡00-1区地形図

#### 2. 層位と遺物の出土状況

(PL. 4・12)

黒褐色シルト（1層・約10cm）を除去すると、褐灰色シルト（2層・約10cm）、礫混じり褐灰色シルト（3層・約20～30cm）、礫混じり黄褐色粘質シルト（4層・約40～60cm）と続き、黄褐色粗砂（5層）にいたる。

1・2層は現代耕作土、3層は一部にブロック状の黄褐色粘土がみられるなど土質が均一でないため客土とも考えられる。4層はやや軟弱で客土とも考えられたことから確認のため掘削したが、遺物は出土せず堆積状況をもても自然堆積と考えられ、地山と判断した。いずれの層位からも遺物は出土せず、3層及び4層の上面において遺構検出を行ったが、遺構は確認されなかった。

註 ① 泉南市教育委員会「新伝寺遺跡」『泉南市文化財年報No.1』（1995）

② 泉南市教育委員会「北野遺跡」『泉南市文化財年報No.1』（1995）

## 第11章 中小路南遺跡の調査

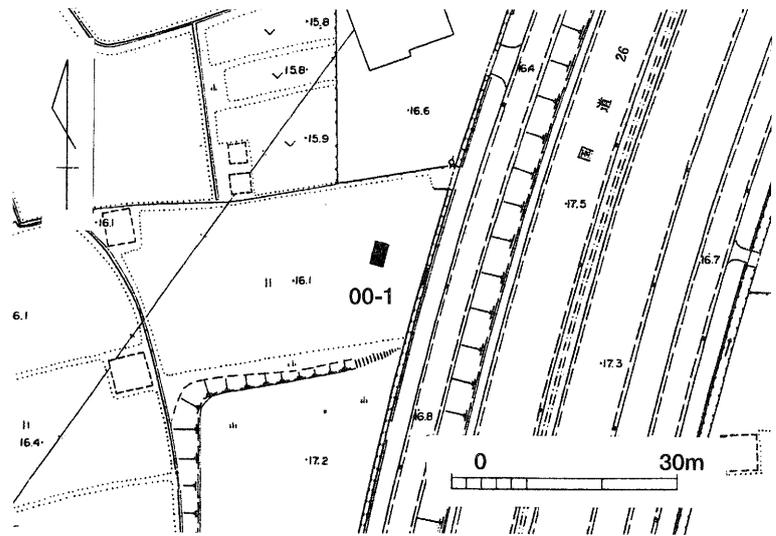
### 第1節 既往の調査

遺跡は市域平野部の中央を占める低位段丘上に立地する。段丘中央には、ほぼ南北方向にのびる浅谷が形成されており、その谷の右岸に当遺跡をはじめ、中小路遺跡、中小路北遺跡、中小路西遺跡<sup>①</sup>などの遺跡群が密集している。転じて浅谷の左岸には顕著な遺跡が認められないことと対照的であり、非常に興味深い。当遺跡は平成3年の発見以来、現在までに数件の発掘調査が行われており、平成6年に実施された共同住宅建設に伴う調査<sup>②</sup>では、中世の灌漑用水路が確認されている。周辺の中小路西遺跡などの調査成果とも合致しており、中世を画期として周辺の段丘開発が進んだことを示している。

### 第2節 00-1区の調査

#### 1. 位置 (第18・23図)

調査区は、遺跡の東端部に位置し、地形分類では低位段丘面上に立地する。先の共同住宅建設に伴う調査地点から北東へ約40mの地点である。現況は休耕地であり、トレンチは1カ所設定した。



第23図 中小路南遺跡00-1区地形図

#### 2. 層位と遺物の出土状況

(PL. 4・12)

現代耕作土である灰黒色土(約20cm)及び橙色混じり淡灰褐色土(約10cm)、淡灰褐色混じり淡黄色土(約

20~30cm)を除去すると、淡暗褐色土(約40cm)がほぼ全域にわたって水平堆積をみせており、トレンチの南端部では部分的に淡灰褐色土(約10cm)が存在する。続いて橙色粘土の地山にいたる。地山上面は概ね水平で、標高は13.6m前後を測る。これらのうち、地山直上の2層はいずれも旧耕作土と捉えられるもので、特に淡暗褐色土からは中世の土師器細片などが出土した。

地山上面において精査を行ったが、遺構は確認されなかった。

註 ① 泉南市教育委員会「中小路西遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XII』(1995)

② 平成6年度、泉南市教育委員会の発掘調査による。

## 第12章 北野遺跡の調査

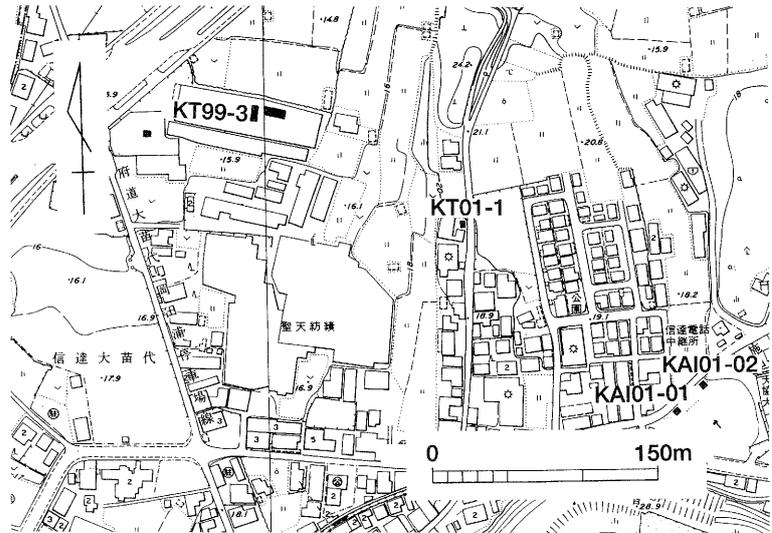
### 第1節 既往の調査

遺跡は市域の東部、榎井川の左岸に位置する。1988年度の分布調査によって周知の遺跡となった。東西約350m、南北約330mを計り、地形分類では洪積段丘低位面にあたる。

これまでの調査例は少なく、本書報告分を除くと数例しかない。

このうち91-1区<sup>①</sup>では、10世紀後半から11世紀ごろの掘立柱建物、井戸、溝などが検出されている。この掘立柱建物は、桁行ないし梁行が7間の規模をもつものである。

また、本遺跡周辺には遺跡南東に白鳳時代に建立された海会寺跡<sup>②</sup>や、遺跡南には熊野街道<sup>③</sup>がみられる。古来、人々の往来が盛んな地域であったと考えられる。

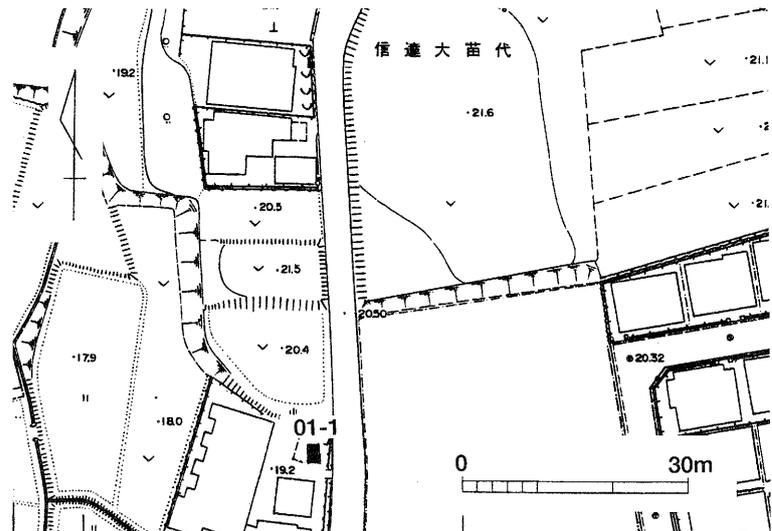


第24図 北野遺跡・海会寺跡調査区位置図

### 第2節 01-1区の調査

#### 1. 位置 (第24・25図)

調査区は、遺跡の南東部で、地形分類では洪積段丘低位面にあたる。前年度に調査した00-1区<sup>①</sup>の約10m南に位置する。現在は宅地開発等で消失しているものの、昭和30年代までは、稲荷山と呼ばれる丘陵が存在しており、調査区はその丘陵の北西裾部分にあたる。現況は更地でトレンチは1カ所設定した。



第25図 北野遺跡01-1区地形図

#### 2. 層位と遺物の出土状況

(PL. 4・12)

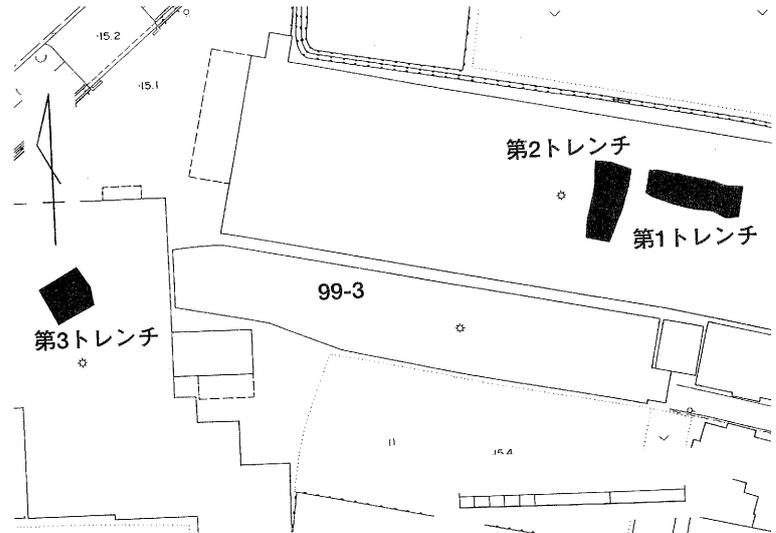
盛土(1層・約120cm)を除去すると、黒褐色シルト(2層・約15cm)と続き、黄褐色粘質シルト(3層)にいたる。1層は現代の宅地造成に伴うもので、2層はそれ以前の耕作土、3層は00-1区で確認さ

れている地山である。3層上面で精査を行ったが遺構はみられず、いずれの層位からも遺物は出土しなかった。

### 第3節 99-3区の調査

#### 1. 位置 (第24・26図)

調査地は遺跡の北東部にあたり、平安時代後期の大型掘立柱建物<sup>⑤</sup>が検出された91-1区の西側約100mの地点である。本調査区でも集落のひろがりを確認できる遺構の検出が期待された。地形分類上は洪積段丘低位面にあたる。なお、トレンチは3カ所、東から第1トレンチ、第2トレンチ、第3トレンチとし、調査の対象とした。



第26図 北野遺跡99-3区地形図

#### 2. 層位と遺物の出土状況

(PL. 5・13)

各トレンチの基本層序はほぼ同様であり、約40cmの盛土を除くと現代耕作土であるⅠ層・暗灰色シルト(約20cm)、Ⅱ層・床土層である淡赤色砂質シルト(約5cm)、Ⅲ層・旧耕作土であるⅣ層・淡赤灰色砂質シルト(約10cm)、Ⅴ層・褐灰色粘質シルト(約10cm)、Ⅵ層・褐色粘質シルト(約10cm)、Ⅶ層・灰褐色砂質シルト(マンガン粒を多く含む・約15cm)と続き、Ⅷ層・黄褐色粘質シルト(地山)にいたる。このうち、第1トレンチのⅦ層より土師器、須恵器、黒色土器A類が出土した。

#### 3. 遺構 (PL. 5・13)

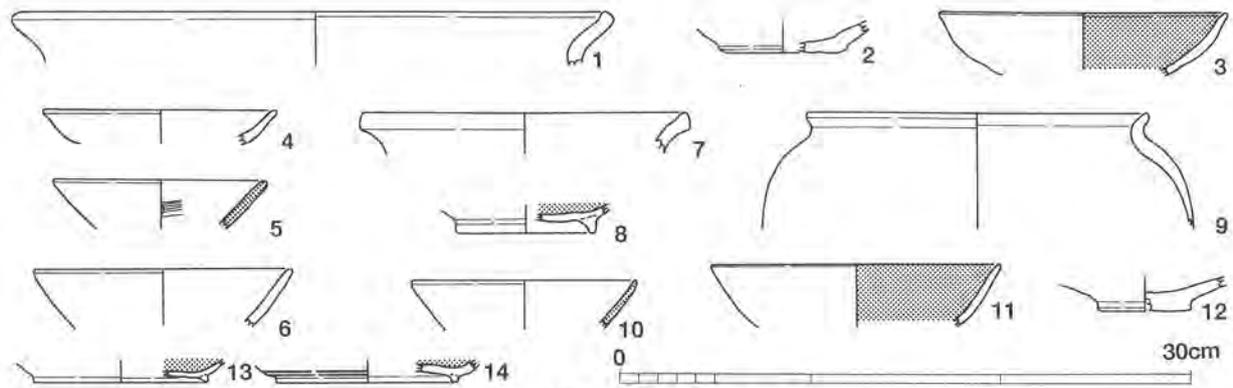
各トレンチとも、地山である黄褐色粘質シルト(Ⅷ)層上面で遺構を確認したが、調査区断面によると後述する第2トレンチのSX01以外は、Ⅶ層をベースとする遺構と考えられる。

第1トレンチでは、多数のピットを検出した。これらのピットで構成される2棟の掘立柱建物(SB01、02)は、いずれも軸方向は、W-18°-Nで、柱間は1.5m、2間の柱列一辺のみの検出である。

その他のピットは、直径が5~40cm、深さが約15~30cm、柱痕のあるものとなないものがみられる。埋土は、前者が掘立柱建物を構成するピットと同様で、後者が灰褐色シルトである。遺物は、SB01・02を構成するPit01・04のほか、Pit07・08・10・12・13・19で検出している。

第2トレンチでは、ピット、土坑、溝を検出した。ピットは、直径が約20cm、深さが約15cm、柱痕のあるものとなないものがみられる。埋土は、前者が第1トレンチの掘立柱建物を構成するピットと同様で、後者が灰褐色シルトである。遺物はいずれのピットからも検出されなかった。

SX01は、検出長約1.2m、幅0.8mの長楕円形で、断面はV字を呈する。埋土は暗褐色シルトで、遺物



第27図 北野遺跡99-3区出土遺物

は出土していない。

SD01は、検出長0.4m、幅0.1m、深さ約0.1mで、断面は浅い皿形を呈する。埋土は茶褐色シルト（マンガン粒を含む）で、遺物は出土していない。

第3トレンチでは溝、ピットを検出した。SD01～03は、いずれも幅は最大約20cm、深さは最大約10cm、断面は椀型を呈する。埋土は褐色シルト（マンガン粒を多く含む）で、遺物は出土していない。

Pit01は、直径は約20cm、深さは約5cm、断面は皿型を呈する。柱痕は確認されず、埋土は褐色シルト（マンガン粒を多く含む）で、遺物は出土していない。

#### 4. 遺物（第27図、PL. 16）

確認した遺物は、土師器、須恵器、黒色土器A類、灰釉陶器、瓦器である。1は第1トレンチのⅧ層、2～12は第1トレンチのピット、13・14は第2トレンチのピットからそれぞれ出土した。

1は土師器甕である。口径31cm。摩耗が激しく調整は確認できない。2はSB01（Pit01）から出土。土師器皿で、底径6.6cm。底部に糸切り痕がのこる。3はSB02（Pit04）から出土。黒色土器A類椀で、口径は15.0cm。体部外面をユビオサエで仕上げる。4・5はPit07から出土。4は土師器皿である。口径12.2cm。内外面ともナデ調整で仕上げる。5は瓦器椀である。口径11.2cm。内面にヘラミガキを施す。6はPit08から出土。土師器椀で、口径13.6cm。摩耗が激しく調整は確認できない。7・8はPit10から出土。7は灰釉陶器瓶である。口径17.4cm。8は黒色土器A類椀である。高台径7.2cm。体部外面はユビオサエで仕上げる。9はPit12から出土。土師器甕で、口径18cm。体部外面は粗いナデ調整。10・11はPit13から出土。10は瓦器椀である。口径11.8cm。摩耗が激しく調整は確認できない。11は黒色土器A類椀である。口径15.2cm。体部外面はユビオサエで仕上げる。12はPit19から出土。土師器皿で、底径5cm、底部に糸切り痕がのこる。13・14はPit02出土。13は黒色土器A類椀である。高台径9cm。14は黒色土器A類椀である。高台径9.4cm。これらの遺物から、第1トレンチで確認されたSB01・02を含むピットは、おおよそ10世紀から11世紀代のものと考えられる。

- 註 ① 泉南市教育委員会「北野遺跡」『泉南市文化財年報No.1』（1995）  
 ② 泉南市教育委員会「海会寺」（1987）  
 ③ 大阪府教育委員会「熊野・紀州街道 論考編 -歴史の道調査報告書第1集-」（1987）  
 ④ 泉南市教育委員会「北野遺跡00-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XVIII』（2001）  
 ⑤ ①と同じ

## 第13章 海会寺跡の調査

### 第1節 既往の調査

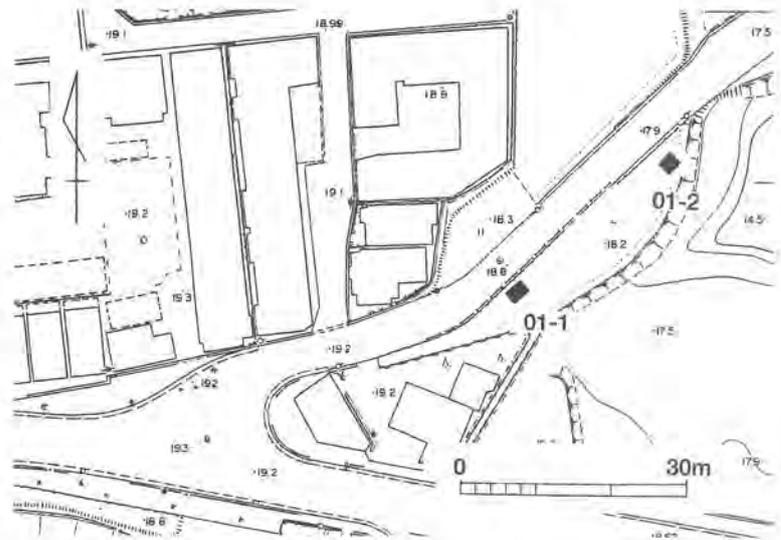
遺跡は市域の北東部、現大苗代集落の東に位置する一岡神社の境内地を中心とする。昭和58年以降、本格的な発掘調査が行われ、7世紀後半から9世紀代までの古代寺院と、中世を中心とした時期にも同地内に寺院が存在していたことが確認されている。史跡指定にかかる確認調査では、法隆寺式伽藍配置をとり、造営当初用いられた軒丸瓦が吉備池廃寺や四天王寺と同範品であったほか、造営にあたって施された大規模な整地、造営にかかる瓦窯、鍛冶炉などが確認されている。また、寺域の東隣には建立豪族の居館とされる掘立柱建物群がみつまっている<sup>①</sup>。

さらにその後の調査でも、幾つかの成果が得られている。寺域の西隣における調査では、7世紀後半代のもものとされる粘土採掘坑<sup>②</sup>、寺域の南隣りでは7～8世紀代の瓦窯が3基みつかったほか、谷をせき止めて設置された木樋<sup>③</sup>などが確認されている。

### 第2節 01-1区の調査

#### 1. 位置（第24・28図）

調査区は、遺跡の南西部で、地形分類では洪積段丘低位面に位置する。現大苗代集落の東のはずれにあたり、付近は宅地化されている。なお、寺院伽藍からは南西約50mに位置し、隣接する96-1区では、谷地形が検出されている<sup>⑤</sup>。現況は耕地で、トレンチは1カ所設定した。



第28図 海会寺跡01-1・2区地形図

#### 2. 層位と遺物の出土状況

(PL. 4・14)

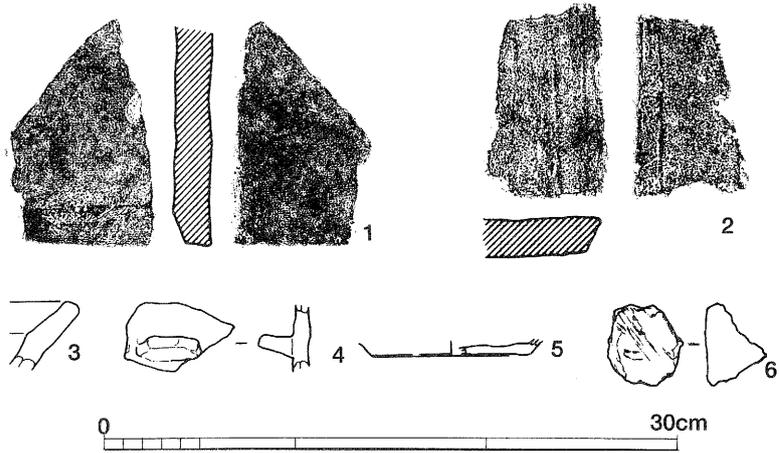
盛土（1層・約50cm）を除去すると、黒褐色シルト（2層・約5cm）、黄褐色粘土ブロック混じり褐灰色シルト（3層・約50～60cm）と続き、黄褐色細砂（4層）にいたる。

1層は宅地造成に伴う盛土、2層は旧耕作土、3層はブロック状の黄褐色粘土がみられるほか炭化物や焼土ブロックなどを含むため客土と考えられる。4層は、砂質ではあるが非常に固く締まり、南東にむかって10cmほどレベルを下げています。地形分類をみると海宮宮池から谷底低地が舌状に伸びており、この比高差は旧地形に起因するものと考えられることから、無遺物層と認定した。

このうち3層から、土師器及び瓦などが出土した。3層及び4層の上面において遺構検出を行ったが、遺構は確認されなかった。

### 3. 遺物 (第29図、PL. 15)

図示した遺物は平瓦、土師質鍋、土師質皿、焼土塊である。いずれも3層から出土した。1・2は平瓦である。1は二次焼成によるものか、全体に赤変している。凹面は長軸に対し横方向、凸面は方向は不明だがナデ調整で仕上げる。凹面の端縁には面取りがほどこされる。2は凸面側縁端にヘラケズリがみられる。凹面に幅2cm程の長軸に平行した圧痕がみられ、離れ砂の痕跡がみられる。



第29図 海会寺跡01-1区出土の遺物

3は土師質鍋である。内外面ともナデ調整がみられ、端部をヨコナデで仕上げる。4は把手付鍋である。内外面ともナデで仕上げる。5は土師質皿である。摩耗が激しく調整は不明瞭である。6は焼土塊である。スサ入り粘土でいびつながら面をもつ。断面をみると面をもつ部分が茶褐色に変色し、それから離れるにつれ赤褐色へと変化している。このような被熱状況から何らかの壁体である可能性が指摘できる。これらの遺物では2層の明確な年代はつかみかねるが、おおよそ中世の範疇で捉えることができよう。

## 第3節 01-2区の調査

### 1. 位置 (第24・28図)

調査区は、遺跡の南西部で、地形分類では洪積段丘低位面に位置する。現況は更地で、トレンチは1カ所設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 4・14)

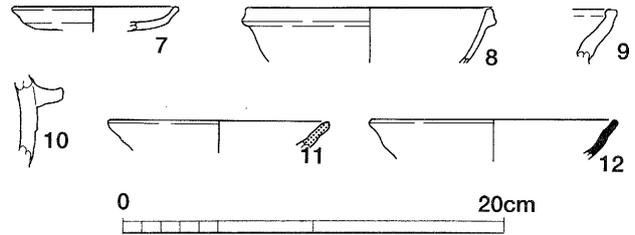
盛土(1層・約80cm)を除去すると、黄褐色粘土ブロック混じり褐灰色シルト(2層・約20cm)、黄褐色粘土ブロック混じり褐色シルト(3層・約20cm)、褐灰色シルト(4層・約20cm)、灰色シルト(5層・約30cm)と続き、黄色砂質粘土(6層)にいたる。

1層は宅地造成に伴う盛土、2・3層は旧耕作土、4・5層は6層をベースとする谷地形の埋土と考えられる。4層は、南東方向に向かってレベルを下げており、隣接する01-1区で検出した谷地形と同一のものと考えられる。4・5層からは須恵器や白磁のほか土師器が出土した。4・6層の上面において遺構検出を行ったが、遺構は確認されなかった。

### 3. 遺物 (第30図、PL. 15)

図示した遺物は土師質皿、土師質羽釜、白磁、瓦器皿、須恵器杯である。7・8は4層から、9~12は5層から出土した。7は土師質皿である。口径8.7cm、器高1.3cm。口縁端部にヨコナデを施す。8は白磁碗である。口径12.8cm。口縁端部は外方向に折り曲げて成形している。9は土師質羽釜である。内

外面ともヨコナデで仕上げる。10は土師質羽釜である。鏝は丁寧なヨコナデで仕上げる。頸部外面には沈線状の段がみられる。体部外面は横方向のヘラケズリ、内面は横方向のハケメがみられる。11は瓦質皿である。口径11.6cm。口縁端部はヨコナデをほどこす。12は須恵器杯である。口径は13.2cm。口縁端部は回転ナデをほどこす。



第30図 海会寺跡01-2区出土の遺物

これらの遺物から、4層は15世紀代、5層は12世紀代と考えられる。

- 註 ① 泉南市教育委員会『海会寺跡』（1987）  
 泉南市教育委員会「海会寺跡Ⅱ」『泉南市文化財年報No.1』（1995）  
 ② 泉南市教育委員会「海会寺跡Ⅰ」『泉南市文化財年報No.1』（1995）  
 ③ 泉南市教育委員会『海会寺跡発掘調査現地説明会資料Ⅴ－瓦窯の調査－』  
 （財）大阪府文化財調査研究センター「重要文化財 海会寺跡出土品」『発掘速報展'97』（1997）  
 ④ ③と同じ  
 ⑤ 泉南市教育委員会「海会寺跡96-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XIV』（1997）

## 第14章 下村遺跡の調査

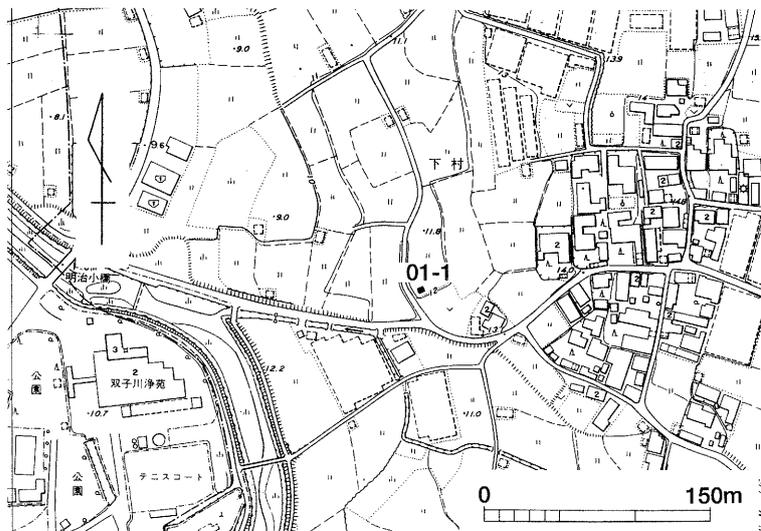
### 第1節 既往の調査

遺跡は新家川右岸のちょうど柳谷川と合流する付近に位置し、地形分類では洪積段丘低位面及び沖積段丘面にあたる。遺跡東半には現下村集落が位置し、西半は耕作地として利用されている。

これまでの調査は遺跡東半の下村集落内で行われている。92-1区では中世の柱穴と近世のカマド、<sup>①</sup>95-1区では弥生時代中期の土坑、中世の掘立柱建物などが確認されている。周囲の遺跡では、遺跡東側の丘陵で、弥生時代後期の高地性集

落<sup>③</sup>が確認された新家オドリ山遺跡のほか、フキアゲ山古墳群や新家古墳群<sup>④</sup>が、新家川左岸の丘陵裾では弥生時代中期の方形周溝墓が確認された向井山遺跡<sup>⑤</sup>や、同時期の溝を確認した新家遺跡<sup>⑥</sup>がある。

また、『日輪山清明寺代々記并三谷古記』によると、下村から別所までの新家川流域における開発は大池築造の記録がある13世紀代以降であり、それ以後の活発な耕地開発の様相が伺える。<sup>⑦</sup>



第31図 下村遺跡調査区位置図

### 第2節 01-1区の調査

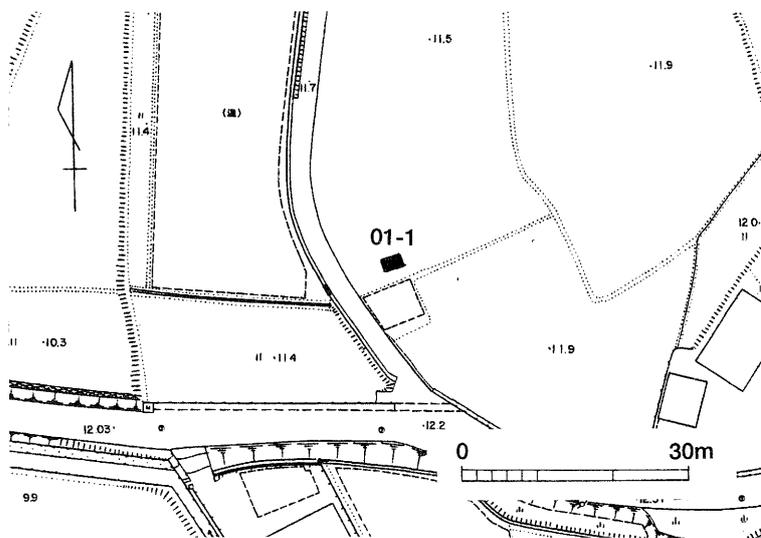
#### 1. 位置 (第31・32図)

調査区は遺跡の西部で、地形分類では沖積段丘に位置する。現下村集落の西側約50mの地点にあたる。本調査区の北東約100mに位置する95-1区では、弥生時代中期の土坑などが確認されている。<sup>⑧</sup>現況は更地で、トレンチは1カ所設定した。

#### 2. 層位と遺物の出土状況

(PL. 4・15)

盛土及び現代耕土層(1層・約40cm)を除去すると、淡黄褐色シルト



第32図 下村遺跡01-1区地形図

(2層・約20cm)、灰黄褐色シルト(3層・約50cm)、黄褐色シルト(4層・約20~40cm)、灰白色細砂(5層・約20cm)と続き、礫混じり灰白色細砂(6層)にいたる。

2、3層は旧耕作土、5層以下は氾濫作用に起因する土層と考えられる。このうち、3層から瓦器碗や土師器などの小片が出土しており、4層以下は地山と考えられる。3層及び4層の上面で精査を行ったが遺構は検出されなかった。今回の調査では、4層上面で遺構は検出されなかったものの、95-1区で確認された遺構面と対応すると考えられ、付近に遺構の遺存する可能性が指摘できる。

- 註 ① 泉南市教育委員会「下村遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』(1993)  
② 泉南市教育委員会「下村遺跡95-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIII』(1996)  
③ 泉南市史編纂委員会「第1章 原始の泉南」『泉南市史 通史編』(1987)  
④ ③と同じ  
⑤ 泉南市教育委員会『泉南市向井山遺跡発掘調査報告書』(1971)  
⑥ 泉南市教育委員会「新家遺跡」『泉南市文化財年報No.1』(1995)  
⑦ 泉南市史編纂委員会「第3章 交通と産業」『泉南市史 通史編』(1987)  
⑧ ②と同じ

## 第15章 まとめ

本書で報告したのは、市内遺跡における文化財保護法にもとづく発掘調査のうち、個人住宅建設などに伴うものである。平成13年度の12月31日までに行われた18件のほか、未報告分にあたる平成12年度の1月1日から3月31日までに行われた5件と平成11年度の1件を含む合計24件である。今回報告した成果と、既往の調査成果とを対照することで本書のまとめとしたい。

男里遺跡では6件の調査成果を報告している。

01-1区では、遺跡南東部における遺構分布を把握できる新たな資料を得た。包含層などは削平をうけたためか遺存していなかったものの、地山直上において遺構面を確認し、ピットを検出した。調査区の位置する現馬場集落は、今回の調査区の南西及び北西で確認されている弥生時代中期後葉や飛鳥時代から奈良時代にかけての遺構<sup>①</sup>や、北東の長山遺跡で確認されている中世の遺構<sup>②</sup>など、遺構密度が高い地域のほぼ中間にあたり、これまで遺構の存在が明確に把握できるような例はなかった。本調査区では遺物が出土しておらず、現時点ではその時期はつかみかねる。

01-2・3・4区は、隣接した調査区であり、遺跡内における微地形を考える上での資料を得た。各調査区の層位には対応関係がみられ、旧耕土と考えられる褐灰色系シルト、河川の氾濫作用に起因すると考えられる灰褐色粗砂混じり礫層は各トレンチとも一様に確認されており、01-4区及び01-3区にのみ、その間に黒褐色シルト及び黄褐色シルトが介在する。各トレンチにおける灰褐色粗砂混じり礫層上面のレベルが様でなく、おおむね南西方向に向かってレベルを下げていることから、黒褐色シルト層及び黄褐色シルトは灰褐色粗砂混じり礫層をベースとする埋積谷の埋土と考えられる。時期的には01-4区の黒褐色シルト層から黒色土器A類が出土しており、すくなくとも10世紀代には谷地形の埋没が始まり付近が安定した地形へと変化していった可能性が指摘できる。

01-5区では、自然流路を確認した。問題はその時期である。遺物が出土しておらずその時期はつかみかねるが、双子池堤体改修に伴う一連の調査で確認されているものとの関連性を注意しつつ、今後の調査例と対照することで、おおまかな時期判定は可能であろう。

00-10区では、遺跡南東部における遺構分布を追認する資料を得た。付近は中世の耕作痕を除けば、遺跡内において遺構密度の低い地域である（コンターラインが上がるほど遺構密度が低くなる傾向があり、削平された可能性も想定できるが）。調査区の南西約50mで弥生時代中期後葉の方形周溝墓や平安時代末から鎌倉時代の柱穴や鍛冶炉跡<sup>④</sup>などが確認されているものの、それより南東側ではこれといった遺構は確認されていない。今回の調査成果は、これを追認するものである。

戎畑遺跡では、1件の調査成果を報告している。01-1区では、平成7年から8年にかけて行われた95-1区の調査成果を補完する資料を得た。95-1区では、今回の調査区に隣接する箇所ではほぼ南北方向にのびるSD10<sup>⑤</sup>を確認しているが、今回の調査でもその一部が確認された。

高田遺跡では、3件の調査成果を報告している。

01-1区では、遺跡内における地形変遷と土地利用の開始についての資料を得た。旧耕作土と考えられる土層の直下に中世以降の河川堆積が確認された。中世の耕作痕が92-1区で確認されていることから、周辺の地形は中世までは不安定であったと想定できる。さらに、95-1区<sup>⑦</sup>、01-2・3区では遺構、遺物とも確認されていないのは、その不安定さを示す資料とも考えられる。

幡代遺跡では、1件の調査成果を報告している。01-1区では、遺跡中央で確認された平安時代及び室町時代の集落域<sup>⑧</sup>を限定し、遺跡東部の遺構分布を把握できる資料を得た。

岡中遺跡では、1件の調査成果を報告している。00-1区では、現集落に伴う盛土の直下に粗砂から礫で構成される河川堆積を確認した。同様の礫層は遺跡内では広範囲に確認される<sup>⑨</sup>。地形分類では沖積段丘上に位置するが、同様に分類されている男里遺跡南東部で見られるようなシルト層ではない。このような状況は、両者が堆積した過程もしくは程度の差異を反映しているともいえ、地形分類上では同じでも居住域として考えた場合の立地条件にはかなりの格差が想定されるのではなからうか。

芋掘遺跡では、1件の調査成果を報告している。01-1区は、遺跡として周知されて以後、はじめてのものである。地山直上で、遺構面を確認しピットを検出した。これらの年代は、遺物は出土していないので明言できないが、遺構埋土の状況からきわめて新しいものとも考えられる。

岡田遺跡では、3件の調査成果を報告している。

01-1区で確認された5・6層は、遺構及び包含層の存在を想定させる。隣接する97-1・2区<sup>⑩</sup>において確認されたものと類似しており、両調査区間に遺構が存在する可能性が想定できる。

01-2区では、95-2区<sup>⑪</sup>の調査成果を追認する資料を得た。

01-3区では、灌漑施設と考えられる遺構を検出した。埋土の状況から、水路もしくは野井戸と想定でき、出土遺物から近世以降に位置づけられる。岡田西遺跡でも、近世の水路及び野井戸<sup>⑫</sup>が確認されており、同様の灌漑体系が面的に拡がりをもつことを示す資料であろう。

岡田西遺跡では、1件の調査成果を報告している。00-1区では、中世の耕作痕を検出した。隣接する調査区においても同様の遺構<sup>⑬</sup>が確認されており、その成果を追認する内容といえよう。

中小路北遺跡では、1件の調査成果を報告している。00-1区は、遺跡として周知されて以来、はじめてのものであった。調査当時、近隣の方から付近の小字についてご教示頂いた。調査区の北側に隣接する水路は「大門川」、南西に位置する耕地を「□□寺」とそれぞれこの地域では呼んでいたそうである。

中小路南遺跡では、1件の調査成果を報告している。00-1区では、調査例の少ない本遺跡において遺構及び遺物の分布を示す数少ない資料を得た。

北野遺跡では、2件の調査成果を報告している。

01-1区は、遺跡南東に位置する丘陵先端における調査であった。盛土及び現代耕土層直下が地山であり、付近は旧地形があまり残っていないが、海会寺跡に隣接しており瓦窯など遺構の存在も想定される地域である。

99-3区では、10世紀から11世紀代の掘立柱建物を確認した。91-1区<sup>⑭</sup>で検出された掘立柱建物とはほぼ同時期であり、集落域のひろがり<sup>⑮</sup>が想定できる。

海会寺跡では、2件の調査成果を報告している。01-1・2区とも、谷地形を検出し、中世に整地されていることが確認された。このうち01-1区で出土した、平らな面をもつスサ入りの焼土塊が興味深い。断面の被熱痕は一方向から熱をうけたことを伺わせ、しかも平坦面をもつことからなんらかの壁面とも考えられる。中世寺院との関連性が想定できる。

下村遺跡では1件の調査成果を報告している。01-1区では、遺構は検出されなかったものの、95-1区<sup>⑮</sup>の遺構面に対応する層位を確認した。また、確認した遺構面下層を掘削したが、いずれも細砂からなる河川堆積を呈し、下層遺構面の存在は想定しにくい。

以上、今年度報告した調査成果を列記したが、「ひいきめ」すぎる解釈もある（誤認も当然あるだろうが）。狭小な調査区では情報量が絶対的に少ない。にもかかわらず調査成果に対する過剰な期待をもつためであろう。しかし調査成果の活用（とくに啓発）におもきをおけば、遠慮は無用と最近は考える。情報量の少なさから明言を避け「実体不明」のままであるより、あくまでも仮定として認識しつつ「ひいきめ」に解釈しそれを公表することで、以後の調査や第三者による検証を促すことが必要ではないか。

- 註 ① (財)大阪府文化財調査研究センター『男里遺跡発掘調査資料集』(2001)
- ② 泉南市教育委員会「長山遺跡94-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XII』(1995)
- ③ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・I』(1997)  
大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・II』(1997)
- ④ ①と同じ
- ⑤ 城野博文「泉南市戎畑遺跡の調査」『第35回大阪府下埋蔵文化財研究会』(財)大阪府文化財調査研究センター(1997)
- ⑥ 泉南市教育委員会「高田遺跡92-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』(1993)
- ⑦ 泉南市教育委員会「高田遺跡95-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIII』(1996)
- ⑧ 1993年度の(財)大阪府埋蔵文化財協会による調査
- ⑨ 泉南市教育委員会「岡中遺跡94-2区」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XII』(1995)  
泉南市教育委員会「岡中遺跡97-1区」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』(1998)
- ⑩ 泉南市教育委員会「岡田遺跡97-1・2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』(1997)
- ⑪ 平成8年度の市道新設に伴う泉南市教育委員会による調査。  
泉南市教育委員会「調査の経過」『泉南市遺跡群発掘調査報告書』(1997)
- ⑫ 泉南市教育委員会『岡田西・氏の松遺跡発掘調査報告書』(1995)
- ⑬ ⑫と同じ
- ⑭ 泉南市教育委員会「北野遺跡」『泉南市文化財年報No.1』(1995)
- ⑮ 泉南市教育委員会「下村遺跡95-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIII』(1996)

第5表 文化財一覧表

1	正法寺跡	47	野々宮遺跡	93	壑井城跡	139	引谷池窯跡	185	林昌寺瓦窯跡
2	小垣内遺跡	48	慈福寺天満宮本殿	94	奥家住宅	140	兎田遺跡	186	林昌寺銅鐸出土地
3	大谷池遺跡	49	宮ノ前遺跡	95	道ノ池遺跡	141	フキアゲ山東遺跡	187	岡中遺跡
4	大久保B遺跡	50	垣外遺跡	96	岡ノ崎遺跡	142	フキアゲ山1号墳	188	高田山古墳群
5	下高田遺跡	51	屯田遺跡	97	中菖蒲遺跡	143	フキアゲ山2号墳	189	岡中西遺跡
6	紺屋遺跡	52	八王子遺跡	98	岸ノ下遺跡	144	兎田古墳群	190	兩山南遺跡
7	口無池遺跡	53	慈眼院金堂・多宝塔	99	諸目遺跡	145	池尻遺跡	191	福島遺跡
8	東門寺跡	54	日根神社遺跡	100	城ノ塚古墳	146	中の川遺跡	192	尾崎海岸遺跡
9	降井家屋敷跡	55	西ノ上遺跡	101	禪興寺跡	147	岩の前遺跡	193	馬川北遺跡
10	大久保C遺跡	56	川原遺跡	102	タイジョウ寺跡	148	別所北遺跡	194	馬川遺跡
11	中家住宅	57	母山遺跡	103	上之郷遺跡	149	別所遺跡	195	下出北遺跡
12	大久保A遺跡	58	母山近世墓地	104	向井代遺跡	150	高野遺跡	196	室堂遺跡
13	五門北古墳	59	向井山遺跡	105	意賀美神社本殿	151	昭和池遺跡	197	平野寺(長楽寺)跡
14	五門遺跡	60	鏡塚古墳	106	向井池遺跡	152	上村遺跡	198	向出遺跡
15	五門古墳	61	梨谷遺跡	107	三軒屋遺跡	153	狐池遺跡	199	高田西遺跡
16	大浦中世墓地	62	笹ノ山遺跡	108	川原遺跡	154	上野中道遺跡	200	向山遺跡
17	大浦遺跡	63	土丸遺跡	109	岡田東遺跡	155	宮遺跡	201	高田南遺跡
18	甲田家住宅	64	土丸南遺跡	110	岡田遺跡	156	宮南遺跡	202	和泉鳥取遺跡
19	久保B遺跡	65	兩山城跡	111	氏の松遺跡	157	芋掘遺跡	203	兩山遺跡
20	鳥羽殿城跡	66	土丸城跡	112	座頭池遺跡	158	石ヶ原遺跡	204	内畑遺跡
21	墓の谷遺跡	67	下大木遺跡	113	岡田西遺跡	159	高倉山南遺跡	205	皿田池古墳
22	来迎寺本堂	68	大木遺跡	114	新伝寺遺跡	160	本田池遺跡	206	正方寺遺跡
23	池ノ谷遺跡	69	稲倉池北方遺跡	115	中小路北遺跡	161	上代石塚遺跡	207	西畑遺跡
24	成合寺遺跡	70	大西遺跡	116	中小路西遺跡	162	信之池遺跡	208	自然田遺跡
25	山ノ下城跡	71	松原遺跡	117	中小路遺跡	163	滑瀬遺跡	209	玉田山遺跡
26	山出遺跡	72	中開遺跡	118	坊主池遺跡	164	六尾遺跡	210	玉田山古墳群
27	上瓦屋遺跡	73	末廣遺跡	119	中小路南遺跡	165	六尾南遺跡	211	玉田山須恵器窯跡
28	湊遺跡	74	安松遺跡	120	北野遺跡	166	金熊寺遺跡	212	寺田山遺跡
29	壇波羅密寺跡	75	長滝遺跡	121	一岡神社遺跡	167	専徳寺遺跡	213	黒田西遺跡
30	壇波羅遺跡	76	植田池遺跡	122	海会寺跡	168	天神ノ森遺跡	214	鳥取北遺跡
31	佐野王子跡	77	郷ノ芝遺跡	123	海会寺瓦窯	169	キレット遺跡	215	鳥取遺跡
32	上町東遺跡	78	日根野遺跡	124	大苗代遺跡	170	高田遺跡	216	鳥取南遺跡
33	市場東遺跡	79	机場遺跡	125	仏性寺跡	171	男里北遺跡	217	黒田南遺跡
34	若宮遺跡	80	棚原遺跡	126	海菅官池遺跡	172	戎畑遺跡	218	神光寺(蓮池)遺跡
35	上町遺跡	81	羽倉崎東遺跡	127	市場遺跡	173	男里遺跡	219	三味谷遺跡
36	依屋遺跡	82	羽倉崎遺跡	128	向井山遺跡	174	光平寺跡	220	三升五合山遺跡
37	北尻遺跡	83	嘉祥神社本殿	129	新家遺跡	175	光平寺石造五輪塔	221	小口谷遺跡
38	岡口遺跡	84	道ノ池遺跡	130	下村遺跡	176	樽井南遺跡	222	井関遺跡
39	中嶋遺跡	85	羽倉崎上町遺跡	131	下村北遺跡	177	男里東遺跡	223	石田山遺跡
40	小塚遺跡	86	船岡山遺跡	132	下村1号墳	178	長山遺跡	224	西鳥取遺跡
41	十二谷遺跡	87	岡本庵寺	133	新家オドリ山東遺跡	179	山ノ宮遺跡	225	戎遺跡
42	丁田遺跡	88	田尻遺跡	134	新家オドリ山遺跡	180	前田池遺跡	226	貝掛遺跡
43	新池尻遺跡	89	船岡山南遺跡	135	下村2号墳	181	幡代遺跡	227	金剛寺遺跡
44	大坪遺跡	90	夫婦池遺跡	136	新家古墳群	182	幡代南遺跡	228	塚谷古墳群
45	市堂遺跡	91	壑井西遺跡	137	新家オドリ山南遺跡	183	奥ノ池遺跡		
46	北ノ前遺跡	92	藤波遺跡	138	フキアゲ山西遺跡	184	林昌寺跡		

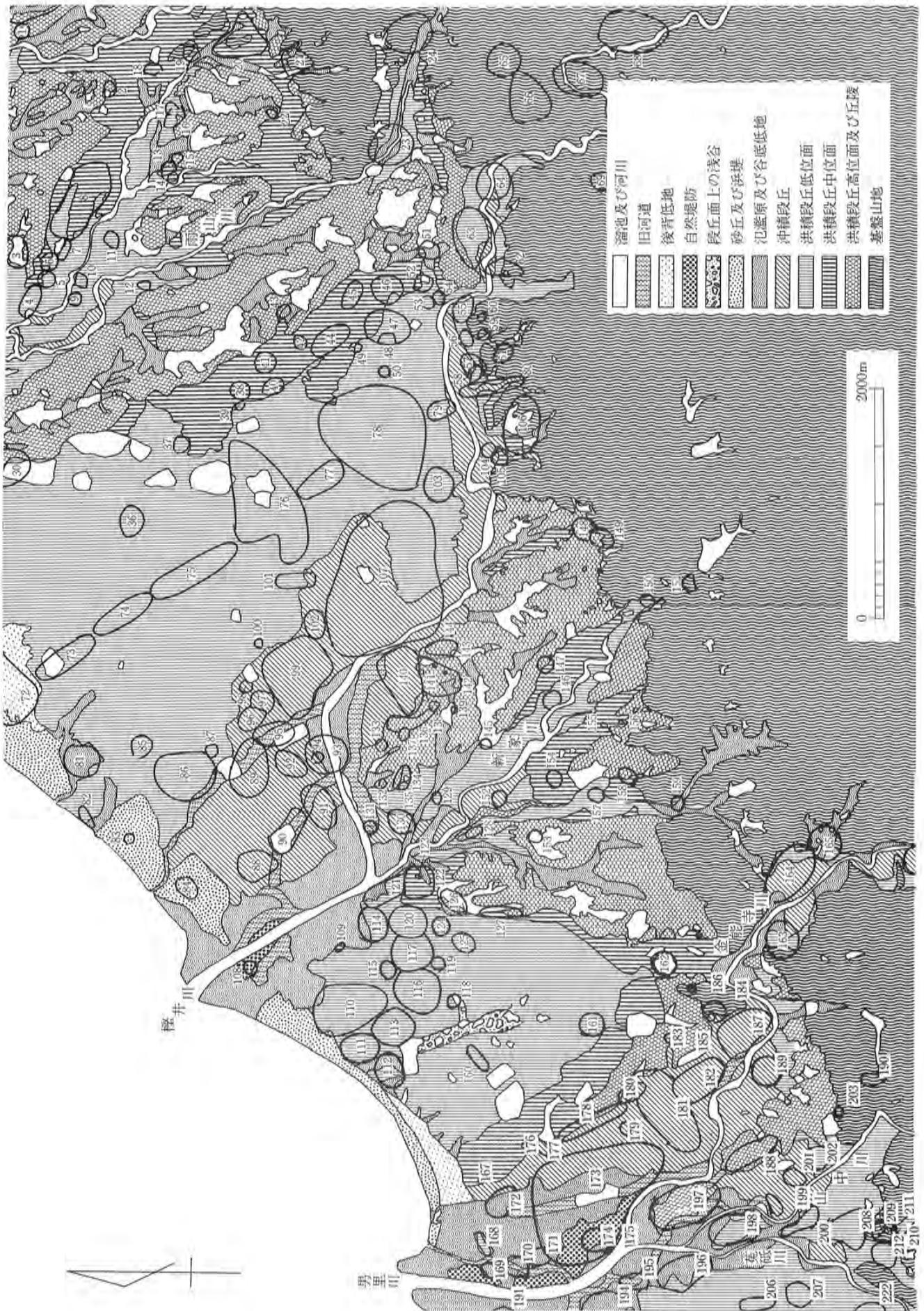
## 報告書抄録

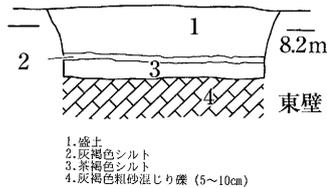
ふりがな	せんなんしいせきぐんはくつちようさほうこくしょ 19							
書名	泉南市遺跡群発掘調査報告書							
副書名	—							
巻次	XIX							
シリーズ名	泉南市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第三十五集							
編著者名	仮屋喜一郎・岡田直樹・石橋広和・岡一彦・城野博文・河田泰之・大野路彦							
編集機関	泉南市教育委員会							
所在地	〒590-0592 大阪府泉南市樽井1丁目1番1号 Tel.0724-83-0001							
発行年月日	西暦2002年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡					
おのさと 男里遺跡	おおさかふせんなんし 大阪府泉南市 おのさと 男里	27228	ON	34度	135度	01-1 200106	3	個人住宅
				21分	15分	01-2 200107	4	個人住宅
				30秒	40秒	01-3 200107	4	個人住宅
						01-4 200107	4	個人住宅
						01-5 200107	2	派出所
					00-10 200101	4	個人住宅	
えびすばた 戎畑遺跡	おおさかふせんなんし 大阪府泉南市 なない 樽井	27228	EB	34度 21分 56秒	135度 15分 39秒	01-1 200111	4	個人住宅
こうだ 高田遺跡	おおさかふせんなんし 大阪府泉南市 おのさと 男里	27228	KD	34度 21分 51秒	135度 15分 18秒	01-1 200107 01-2 200108 01-3 200107	4 3 3	個人住宅 個人住宅 個人住宅
はたしろ 幡代遺跡	おおさかふせんなんし 大阪府泉南市 はたしろ 幡代	27228	HT	34度 21分 09秒	135度 16分 08秒	99-1 200111	3	個人住宅
おかなか 岡中遺跡	おおさかふせんなんし 大阪府泉南市 しんだちおかなか 信達岡中	27228	OK	34度 20分 51秒	135度 16分 38秒	00-2 200102	4	個人住宅
いもほり 芋掘遺跡	おおさかふせんなんし 大阪府泉南市 しんげ 新家	27228	IM	34度 21分 30秒	135度 17分 59秒	01-1 200111	3	個人住宅
おかだ 岡田遺跡	おおさかふせんなんし 大阪府泉南市 おかだ 岡田	27228	OKD	34度 22分 27秒	135度 16分 45秒	01-1 200107 01-2 200108 01-3 200105	4 4 4	個人住宅 個人住宅 個人住宅
おかだにし 岡田西遺跡	おおさかふせんなんし 大阪府泉南市 おかだ 岡田	27228	OKDW	34度 22分 07秒	135度 16分 39秒	00-1 200101	4	個人住宅
なこうじきた 中小路北遺跡	おおさかふせんなんし 大阪府泉南市 なこうじ 中小路	27228	NKN	34度 22分 30秒	135度 16分 59秒	00-1 200103	4	個人住宅
なこうじみなみ 中小路南遺跡	おおさかふせんなんし 大阪府泉南市 なこうじ 中小路	27228	NKS	34度 22分 15秒	135度 17分 02秒	00-1 200102	3	作業所兼倉庫
きたの 北野遺跡	おおさかふせんなんし 大阪府泉南市 しんだちおのしろ 信達大苗代	27228	KT	34度 22分 22秒	135度 17分 15秒	01-1 200104 99-3 199909	3 112	個人住宅 遊技場
かいえ 海会寺跡	おおさかふせんなんし 大阪府泉南市 しんだちおのしろ 信達大苗代	27228	KAI	34度 22分 20秒	135度 17分 30秒	01-1 200104 01-2 200105	3 3	個人住宅 個人住宅
しもむら 下村遺跡	おおさかふせんなんし 大阪府泉南市 しんげ 新家	27228	SM	34度 22分 25秒	135度 16分 50秒	01-1 200106	4	個人住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
男里遺跡 01-1 01-2 01-3 01-4 01-5 00-10	集落？	不明 不明 10-11世紀 不明 不明 不明	ピット 谷地形 自然流路	黒色土器A類 土師器	遺構面を確認
戎畑遺跡 01-1	生産？	不明	溝	土師器	
高田遺跡 01-1 01-2 01-3		14世紀代 不明 不明	自然流路 自然流路 自然流路	須恵器・瓦器	
幡代遺跡 01-1		不明			
岡中遺跡 00-2		不明	自然流路		
芋掘遺跡 01-1		中世以降？	ピット		周知後はじめての調査
岡田遺跡 01-1 01-2 01-3	生産？	不明 不明 近世	流路？ 水路か井戸	土師器 土師器 陶磁器・瓦器	近世の灌漑施設？
岡田西遺跡 00-1	生産	中世	耕作痕	真蛸壺	
中小路北遺跡 00-1		不明			周知後はじめての調査
中小路南遺跡 00-1		中世		土師器	
北野遺跡 01-1 99-3	集落	不明 10-11世紀	掘立柱建物など	瓦器・黒色土器A類・灰釉陶器など	91-1区とほぼ同時期の集落？
海会寺跡 01-1 01-2		中世 12-13世紀・15世紀		瓦・土師質土器・壁体？ 白磁・須恵器・土師器など	中世の整地？ 中世の整地？
下村遺跡 01-1		不明		瓦器・土師器	95-1区の遺構面を確認

# 圖 版

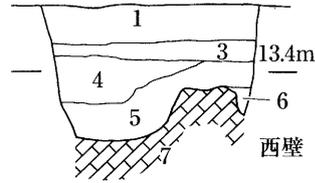






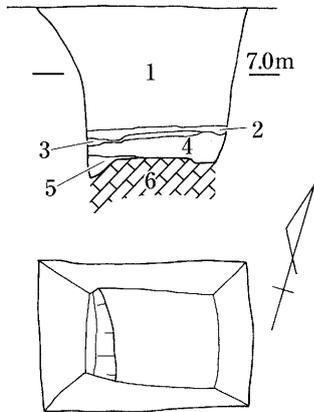
1. 盛土
2. 灰褐色シルト
3. 茶褐色シルト
4. 灰褐色粗砂混じり礫 (5~10cm)

ON01-2区断面図



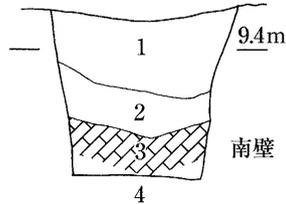
1. 茶褐色シルト
2. 礫混じり茶褐色粘土 (5~10cm)
3. 黄褐色粘土混じり褐色シルト
4. 黄褐色粗砂混じり褐色シルト
5. 礫混じり黒褐色シルト (5~20cm)
6. 黄褐色シルトブロック混じり黒褐色シルト
7. 黄褐色粘土

ON01-1区断面図



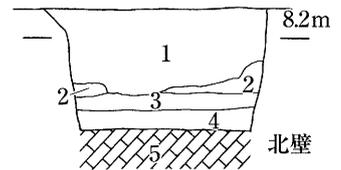
1. 盛土
2. 暗青灰色シルト
3. 灰褐色シルト
4. 茶褐色シルト
5. 黒褐色シルト
6. 礫混じり黄褐色シルト

EB01-1区平面図及び断面図



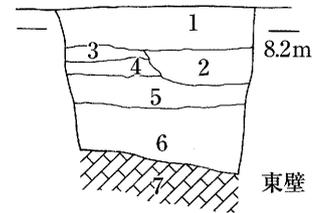
1. 盛土
2. 暗灰色土
3. 茶褐色混じり暗黄褐色粘質土
4. 砂礫

ON01-5区断面図



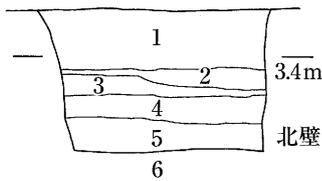
1. 盛土
2. 褐灰色シルト
3. 黒褐色シルト
4. 黄褐色シルト
5. 灰褐色粗砂混じり礫 (5~15cm)

ON01-3区断面図



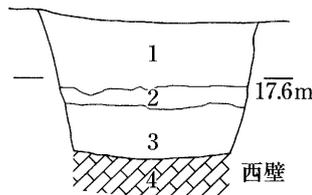
1. 盛土
2. 礫混
3. 礫混じり褐灰色粗砂 (5~10cm)
4. 褐灰色シルト
5. 黒褐色シルト
6. 黄褐色シルト
7. 灰褐色粗砂混じり礫 (5~10cm)

ON01-4区断面図



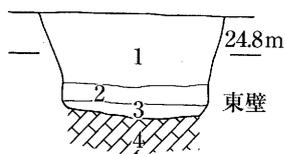
1. 盛土
2. 黒褐色シルトに黄灰色シルトブロックが混入
3. 黄灰色シルト
4. 灰褐色粘質シルト
5. 灰色粗砂混じり灰褐色シルト
6. 礫混じり灰色粗砂 (5cm程)

KD01-1区断面図



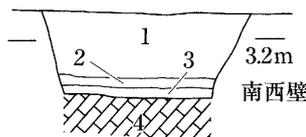
1. 盛土
2. 黒褐色粘質シルト
3. 礫混じり黒褐色粘質シルト (10~15cm)
4. 礫混じり黄褐色シルト (5~10cm)

ON00-10区断面図



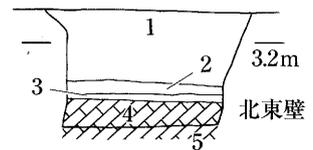
1. 盛土
2. 茶褐色ブロック混じり暗褐色土
3. 暗褐色土
4. 礫混じり赤褐色褐色土

HT01-1区断面図



1. 盛土
2. 灰褐色粘質シルト
3. 褐灰色粘質シルト
4. 灰色粗砂混じり礫 (5~15cm)

KD01-3区断面図

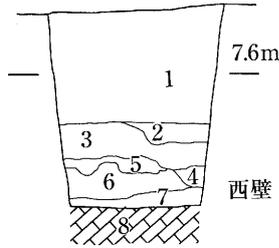


1. 盛土
2. 黒褐色シルト
3. 褐灰色シルト
4. 礫混じり灰色粗砂 (5~10cm)
5. 黄褐色粗砂

KD01-2区断面図

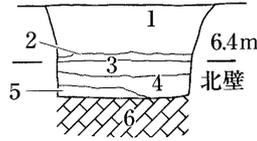


P.L. 4 岡中遺跡・芋掘遺跡・岡田遺跡・岡田西遺跡・北野遺跡①・海会寺跡・下村遺跡調査区



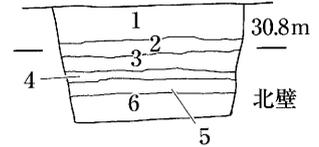
1. 盛土
2. 灰色粗砂
3. 褐色粘質シルト
4. 褐色粘質シルトに灰色粘質シルトがブロック状に混じる
5. 黄褐色粘土
6. 黒褐色シルトと灰色細砂が互層に堆積
7. 青灰色粗砂
8. 礫混じり青灰色粗砂 (5~15cm)

OKD01-2区断面図



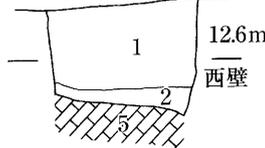
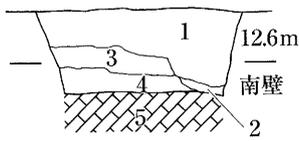
1. 盛土
2. 黒褐色シルト
3. 褐色粘質シルト
4. 褐色粘質シルトに赤褐色粒混入
5. 黒褐色シルト
6. 黄褐色粘土

OKD01-1区断面図



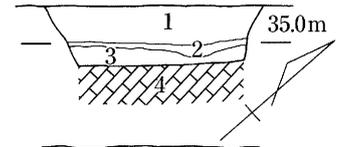
1. 盛土
2. 褐色シルト
3. 明褐色シルト
4. 礫混じり褐色粗砂 (5~10cm)
5. 褐色粗砂
6. 礫混じり褐色粗砂 (5~30cm)

OK00-2区断面図



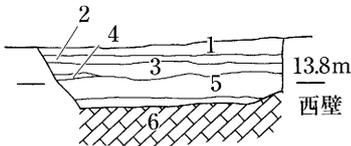
1. 盛土
2. 青灰色細砂
3. 褐色シルト
4. 黄褐色シルト
5. 黄褐色粘土

OKD01-3区断面図



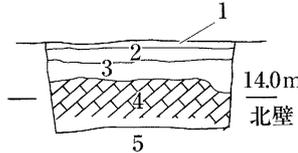
1. 盛土
2. 黒褐色シルト
3. 褐色シルト
4. 黄褐色シルト

IM01-1区平面図及び断面図



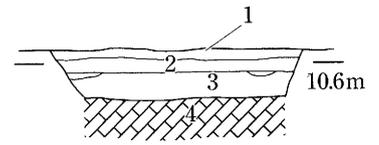
1. 灰黒色土
2. 褐色混じり淡灰褐色土
3. 淡灰褐色混じり淡黄色土
4. 淡灰褐色土
5. 淡暗褐色土
6. 褐色粘土

NKS00-1区断面図



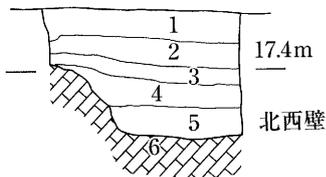
1. 黒褐色シルト
2. 褐色シルト
3. 礫混じり褐色シルト
4. 礫混じり黄褐色粘質シルト
5. 黄褐色粗砂

NKN00-1区断面図



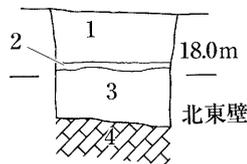
1. 黒褐色シルト
2. 灰白色シルト
3. 褐色シルト
4. 黄褐色粘土

OKDW00-1区平面図及び断面図



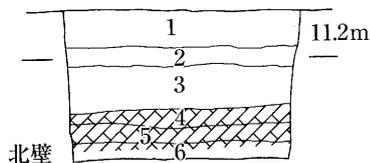
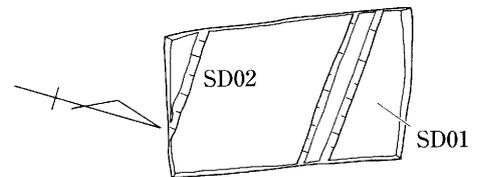
1. 盛土
2. 褐色シルトに黄褐色粘土がブロック状に混入
3. 褐色シルトに黄褐色粘土がブロック状に混入
4. 褐色シルト
5. 灰色シルト
6. 黄色砂質シルト

KAI01-2区断面図



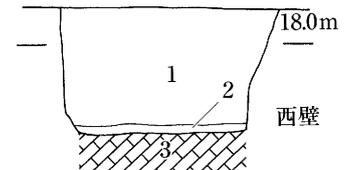
1. 盛土
2. 黒褐色シルト
3. 褐色シルトに黄褐色粘土がブロック状に混入
4. 黄褐色粗砂

KAI01-1区断面図



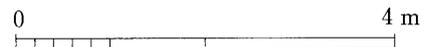
1. 盛土
2. 淡黄褐色シルト
3. 灰黄褐色シルト
4. 黄褐色シルト
5. 灰白色細砂
6. 礫混じり灰白色細砂 (5~10cm)

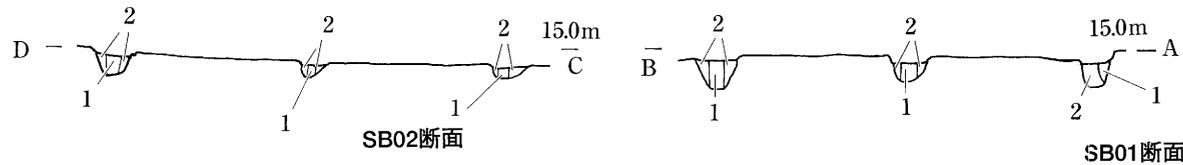
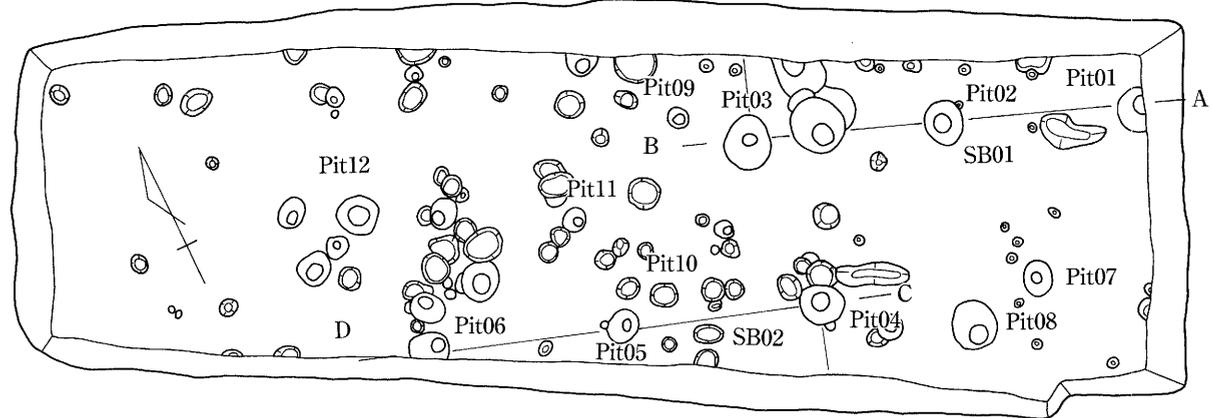
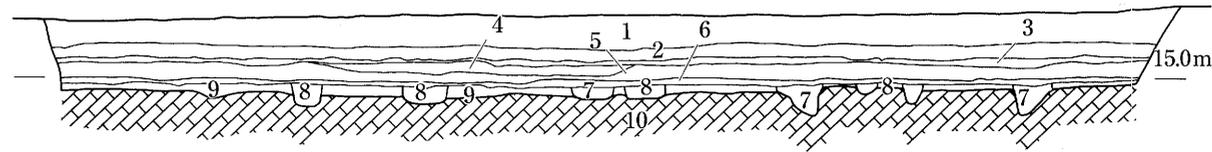
SM01-1区断面図



1. 盛土
2. 黒褐色シルト
3. 黄褐色粘質シルト

KT01-1区断面図

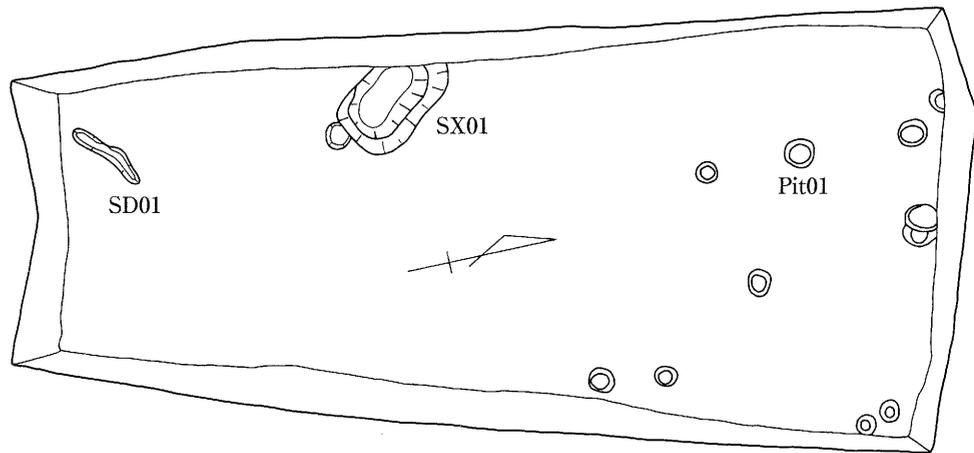
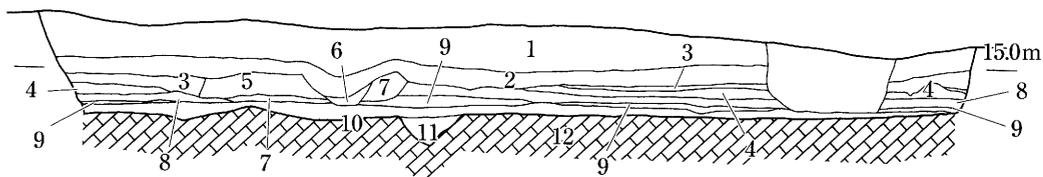




1. 暗褐色粘質シルト  
2. 黄褐色シルトブロック混じり灰褐色シルト

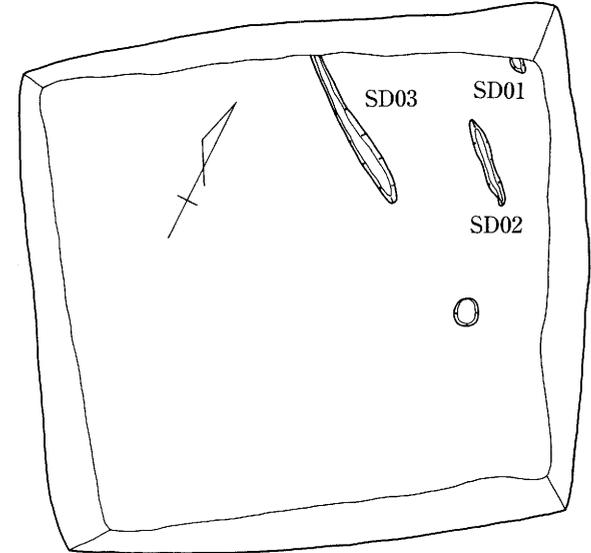
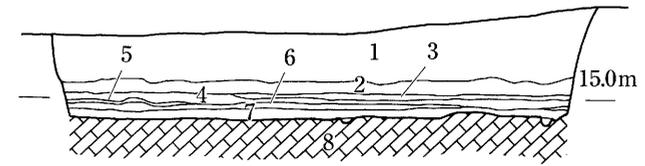
1. 盛土  
2. 暗灰色シルト  
3. 淡赤色砂質シルト  
4. 淡赤灰色砂質シルト  
5. 褐色粘質シルト  
6. 褐色粘質シルト  
7. 黄褐色シルトブロック混じり灰褐色シルト  
8. 灰褐色シルト  
9. 褐色砂質シルト (マンガン粒を多く含む)  
10. 黄褐色粘質シルト

第1トレンチ平面図及び断面図



1. 盛土  
2. 暗灰色シルト  
3. 灰褐色シルト  
4. 淡赤黄色砂質シルト  
5. 暗青灰色粘質シルト  
6. 暗灰色粘質シルト  
7. 暗黄灰色粘質シルト  
8. 淡灰黄色砂質シルト  
9. 暗黄色砂質シルト  
10. 灰褐色砂質シルト (マンガン粒を多く含む)  
11. 暗褐色粘質シルト  
12. 黄褐色粘質シルト

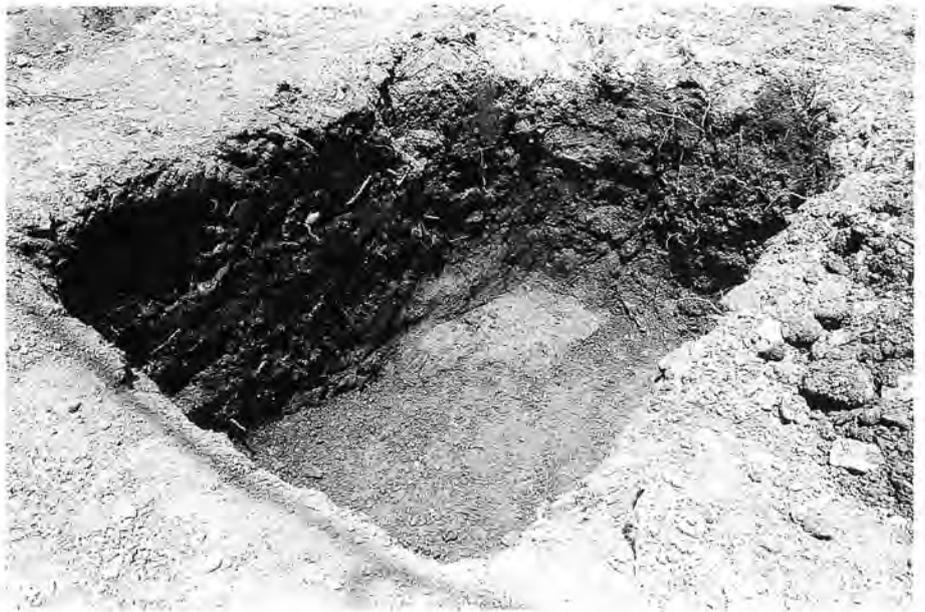
第2トレンチ平面図及び断面図



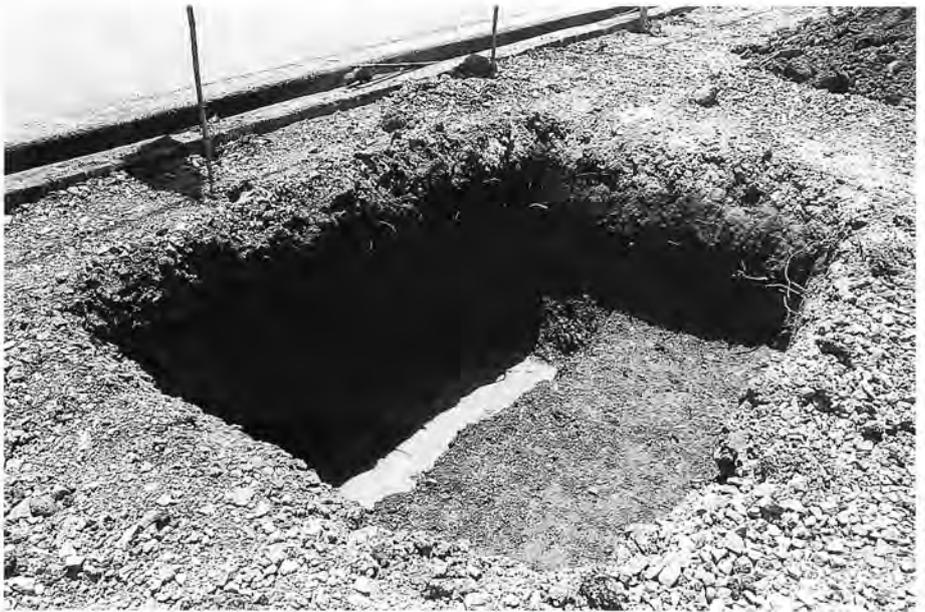
1. 盛土  
2. 暗灰色シルト  
3. 灰褐色シルト  
4. 淡赤黄褐色砂質シルト  
5. 淡灰褐色砂質シルト  
6. 暗黄色砂質シルト  
7. 灰褐色シルト (マンガン粒を多く含む)  
8. 暗褐色粘質シルト

第3トレンチ平面図及び断面図





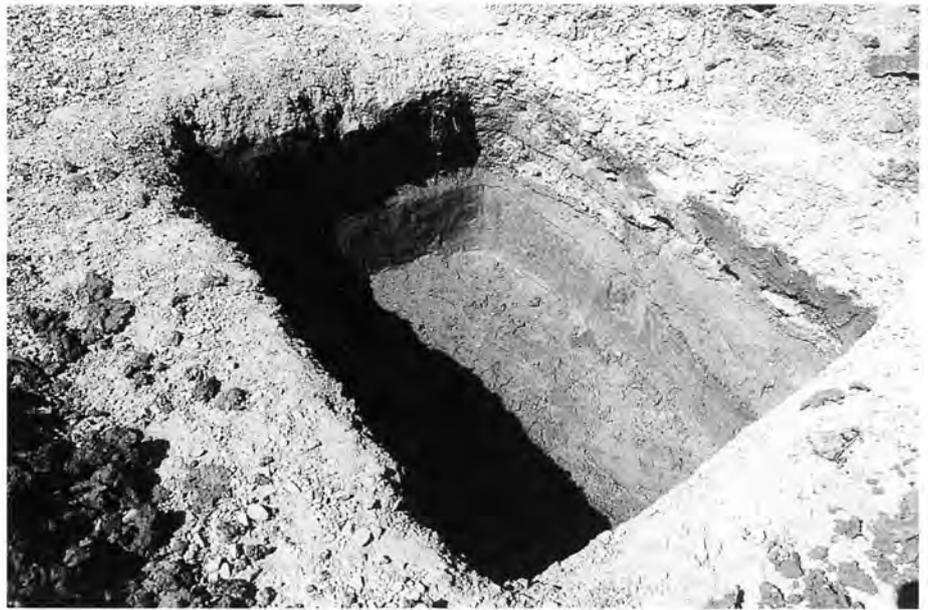
01-1区  
(南東から)



01-2区  
(北西から)



01-3区  
(南西から)



01-4区  
(南西から)



01-5区  
(北から)



00-10区  
(北東から)



EB01-1区  
(東から)



KD01-1区  
(南東から)



KD01-2区  
(南から)



KD01-3区  
(北から)



HT01-1区  
(南西から)



OK00-2区  
(南東から)



IM01-1区  
(南から)



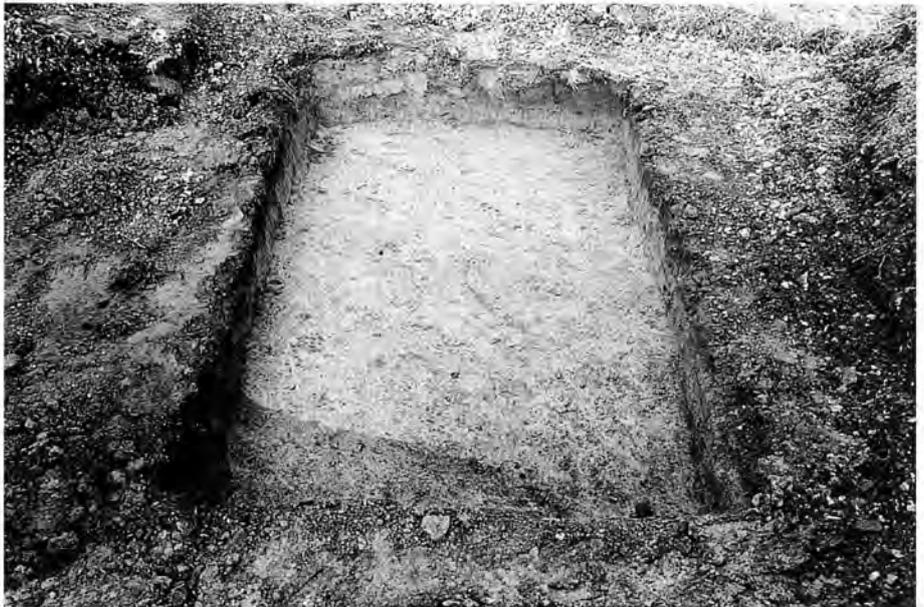
OKD01-1区  
(南から)



OKD01-2区  
(東から)



OKD01-3区  
(北東から)



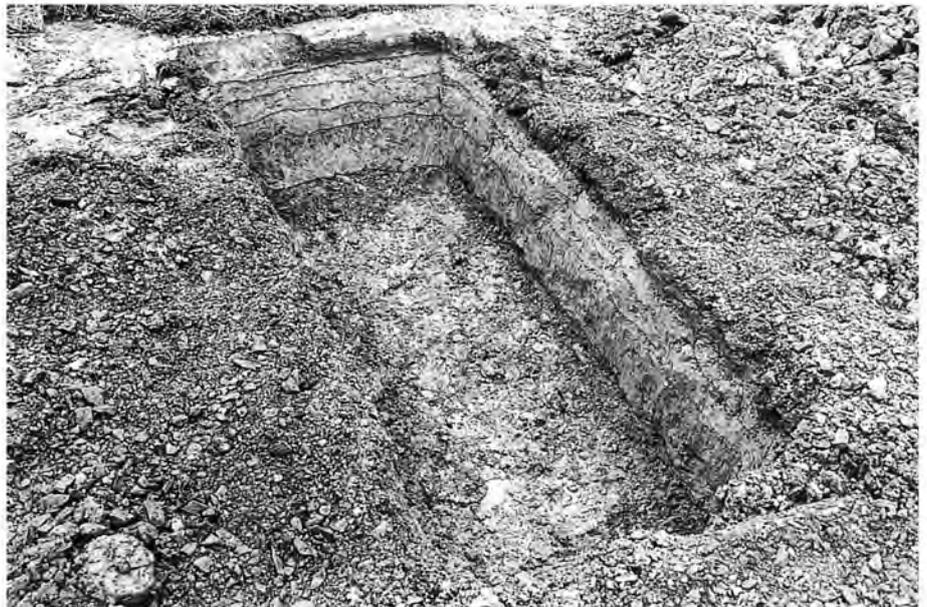
OKDW00-1区  
上層  
(南から)



同上  
下層  
(南から)



NKN00-1区  
(南西から)



NKS00-1区  
(北東から)



KT01-1区  
(北東から)



第1トレンチ  
(南から)



第2トレンチ  
(南から)



第3トレンチ  
(南から)



KAI01-1区  
(南から)



KAI01-2区  
(南から)



SM01-1区  
(南東から)



KAI1



KAI2



KAI10



KAI9



KD1



KAI4



KAI8



KAI1'



KAI2'



KAI10'



KAI9'



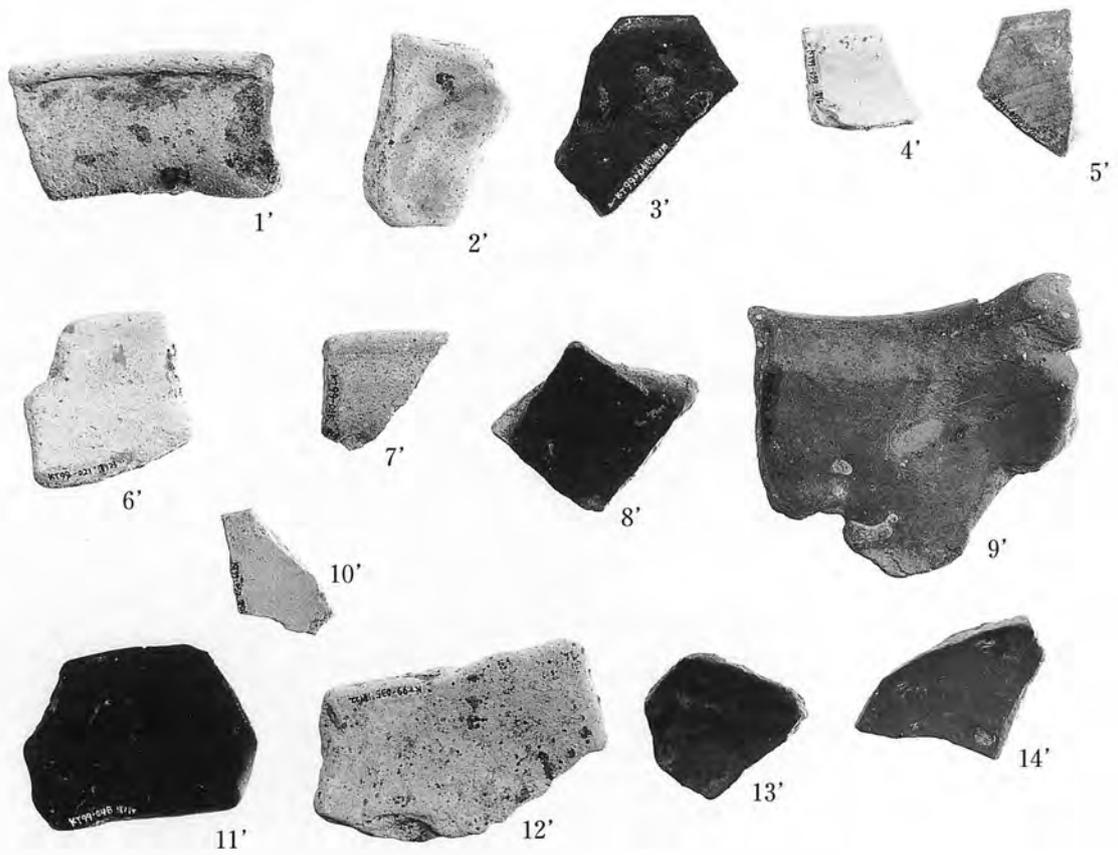
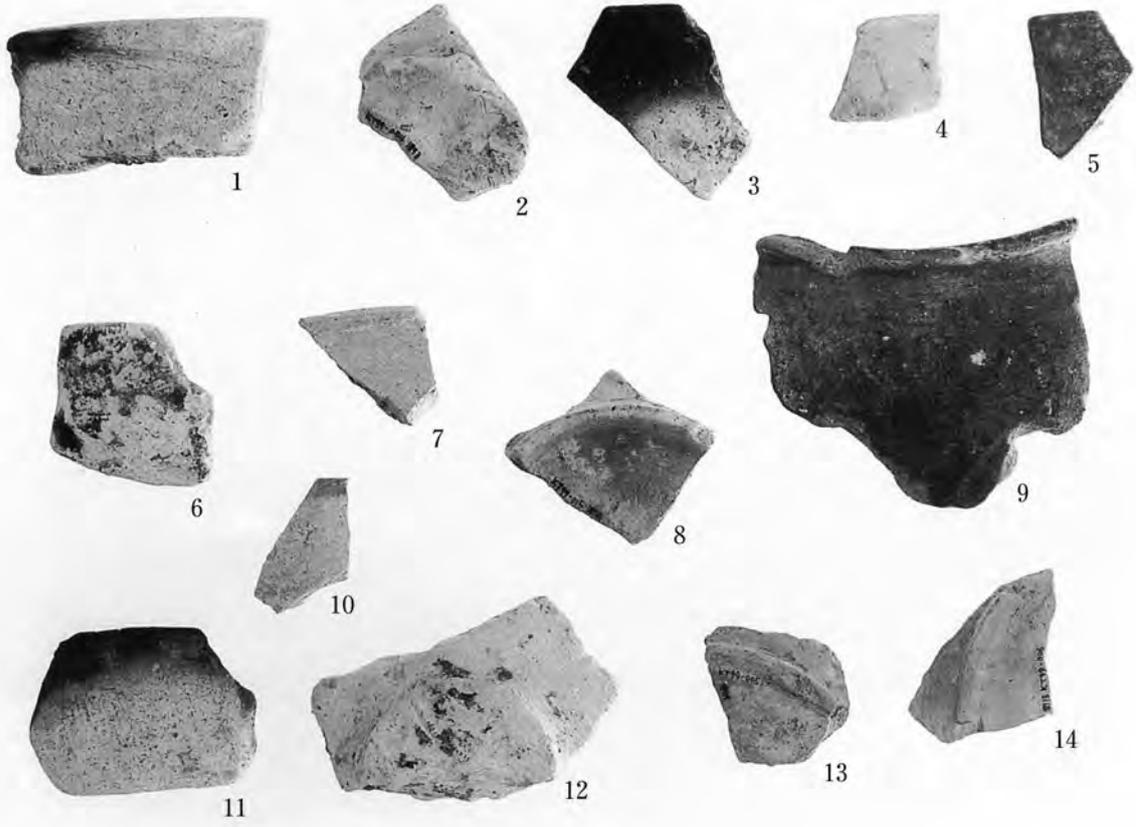
KD1'



KAI4'



KAI8'



泉南市遺跡群発掘調査報告書 XIX

泉南市文化財調査報告書 第36集

2002年 3月31日

編集・発行 大阪府泉南市教育委員会  
泉南市樽井1丁目1番1号  
Tel.0724-83-0001

印刷 有限会社 ヌノタ印刷工房  
泉南市新家4509-4. 1-205  
Tel.0724-80-2760

